

清末小説から 136

2020.1.1

いくたびかの阿英目録26……樽本照雄 1

『環瀛誌陰』の原作……沢本香子 7

包天笑「空中戦争未来記」など(中)……荒井由美21

漢訳小説「ヴェニス商人」(下)——「一磅肉」と「一斤肉」……沢本郁馬27

喋血生：曇花一現の清末小説翻訳家……梁 艳、王 玉32

清末小説から27、39

★本年もよろしくおねがいたします。【予告】『清末民初小説目録 第12版』の公開を予定しています。すでに基本作業は終了しています。本年上半期になるでしょう。ご期待ください☺

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

いくたびかの阿英目録26

樽 本 照 雄

杜訳。光緒己亥(1899)素隱書屋刊。二十九年(1903)文明書局刊。收柯南道爾福爾摩斯探案5種。

- (1) 英国包探訪略迭医生奇案
- (2) 英包探勘盜密約案
- (3) 記僱者復仇事
- (4) 繼父誑女破案
- (5) 呵爾唔斯緝案被戕

前回簡単に紹介した。もう少し続ける。

初出は『時務報』連載(1896-97年)だった。阿英目録はそれを記録しない。阿英は知っていたと思う。訳者を時務報館としたのが根拠だ。ただし時務報館訳は彼が勝手に推測しただけのこと。『時務報』の目次には、桐郷張坤徳訳「域外報訳」と明記している。訳者として張坤徳の名前があがっていることを阿英は失念した。

上の翻訳作品は該誌においては時事報道のあつかいだ。

どういふことか。外国で実際に発生した事件

漢訳ホームズに関連して1

実物を見ることでしかわからないことがある。阿英目録の記述をうのみにするとあぶない。多くはないがそういう例が確かにあるのだ。そのなかのひとつは、ホームズものの漢訳だ。

[阿英154]新訳包探案 時務報館訳。丁楊

の報道である。『時務報』の関係者はそう受け取っている。「域外報訳」のなかにほかの外国ニュースと混在させているのだ。コナン・ドイルの創作だとは知らなかった。本文には「訳歌洛克呵爾唔斯筆記」とか「滑震筆記」などとある。シャーロック・ホームズ筆記、ワトスン筆記とするのを見ると彼らが実在の人物だと考えられていたことがわかる。これが私の従来からの主張だ。

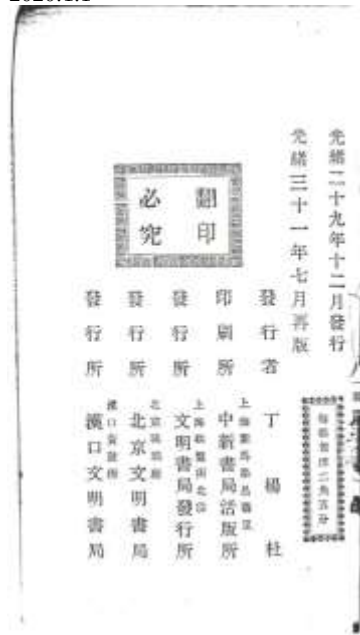
ホームズものではない1種を含んだ5種をまとめて単行本が刊行された。上記阿英目録によれば素隠書屋本と文明書局本だ。

「收柯南道爾福爾摩斯探案5種」とするが上でいったようにそのうち1種類(上の1番)はホームズものではない。それぞれの原作については本稿では関係がないので触れない。樽目録に書いてある。そちらをご覧ください。

阿英の記述はどこが問題か。

訳者をふたりあげている。時務報館と丁楊杜だ。複数の訳者がいるばあいにも実際にはある。珍しくはない。そういった類の翻訳書だろうか。

阿英は、先に刊行された素隠書屋本があるという。ただしその記述から推察するに2種類の該書は発行元の名前が変更になっただけのように思える。内容は両書ともに同じだろう。



『包探案』上海図書館所蔵

結論を先にいう。

訳者を時務報館と丁楊杜にするのは誤りだ。特に丁楊杜がよろしくない。丁楊杜は文明書局の発行者にすぎないのである。

私は上海図書館で確認した。著訳者名不記『包探案(一名新訳包探案)』(上海・文明書局光緒二十九年十二月(1903)／光緒三十一年七月(1905)再版)を示す。

該書奥付に発行者として丁楊杜の名前が見える。阿英はこれを訳者だと勘違いしたらしい。

以上をふまえて樽目録ではつぎのように説明した。

2002樽目録第3版[阿英154]が時務報館訳、丁楊杜訳とするのは誤り。丁楊杜は文明書局の発行者

以下に、諸文献、各目録がどのように記載しているかを紹介したい。刊行年順にならべる。

1915?涵芬楼新書分類総目[涵訳74]英国歌洛克呵爾唔斯著、素隠書屋訳。出版社刊年ともに不記

2011汪家熔[版補下402]英国歇洛克呵而唔
斯著、素隱書屋訳、出版社不記、刊年不記

『涵芬樓新書分類総目』は本稿の最初で紹介した。くりかえせば阿英が『晚清小説史』で取り上げ説明を加えている。当時、小説の収録数がいちばん多かった目録だ。汪家熔が『出版史料 近代部分 補巻』下冊にそれから採録した。同じ説明になっている理由である。ただし上記のように訳者「素隱書屋訳」が明示してあるかどうかは今保留しておく(後述)。

別の目録に次のような説明がある。

1945周越然[越然116]共5案(細目不記)、
翻訳者之姓氏不詳、清光緒二十五年素隱書
屋託昌言報館代印

阿英目録よりも先行する周越然はさすがにきちんと把握している。実物を見て書いているのは確かだろう。ここには訳者は不詳とある。そうすると涵芬樓の目録が「素隱書屋訳」と明記しているのは信頼できるのか。あやふやになる。

阿英目録について私が加えた説明を念のために再度掲げる。

1957阿英[阿英154]時務報館訳、丁楊杜訳
とするのは誤り。丁楊杜は文明書局の発行者。

なにしろ阿英目録の誤りがのちの伝承の原点になっている。何度も書く理由だ。各書目録がくりかえし引用して誤記を再生産する。

そのなかにあつて中村忠行はほかの研究者とは違う。自分で原物にあたりながら考察をすすめる。彼の論文を読んできた。それが昔からのやり方だ。未見のばあいは正直にそう記す。見てもいないものをあたかも見たようにはいわない。一貫してその方法で論文が書かれている。資料が不足するところは推測を試みた。当時の

状況下ではしかたのないことなのだ。それと言っても意味がない。

1978中村忠行[中村S2-11]訳者は、同報の英文翻訳担当の記者であつた張坤徳(字、小塘)であると、周新庵は言ふ(後述)が、素隱書屋刊本には、「時務報館訳。丁楊杜訳」と併記してある趣きに、阿英氏は記してゐる。何れが是か、或いは個々別々の訳出になるものか、詳細は審らかではない^{*80}。

中村は慎重に記述している。目録という2次資料を利用してそれに振り回されていない。いくら強調してもよい。

中国人研究者で例外は郭延礼だろう。そういうのはほとんどの研究者は阿英を支持して誤るからだ。

彼は「近代翻訳偵探小説述略」(『外国文学研究』1996年第3期 1996.8.15 電字版)の注において次のように述べる。

『時務報』に発表されたとき、署名は張坤徳訳であつたが、今はなぜだか「丁楊杜訳」になっている。疑問のまま残して調査を待つ。85頁

郭延礼は疑問のままに残した。丁楊杜訳を無理矢理押し通さなかつただけマシだといえよう。

ついでながらひとつつけ加える。郭延礼が『時務報』の漢訳ホームズにまつわつて次のように説明したことを問題にしておく。

これ(『時務報』掲載の漢訳)は、日本ではじめてコナン・ドイルの作品が翻訳されたとき(1899)にくらべて3年も早い。81頁^{*81}

郭延礼は日本訳のホームズものを引き合いにだした。彼は明記していないがここは上述中村

忠行論文にもとづいている。

そこまで書くならその証拠を出せとおっしゃるのですか。しかたがありません。

別のホームズものを漢訳した黄鼎についての説明が証拠だ。郭延礼はその著作『中国近代翻訳文学概論』において注をほどこしている(147頁)。これは中村忠行論文17頁からの無断借用である。

さて中村はドイルのホームズものの日本語訳は1899年、水田南陽「不思議の探偵」が最初だと指摘した(13頁)。ここをつかまえた郭延礼は『時務報』の漢訳ホームズは1896年掲載だから日本語訳に3年先行すると断言したわけだ。

それ以来のことになる。中国の研究者の多くは郭延礼説を引用しつづけている。

私はそれが事実ではないことを述べた。日本語訳ホームズものの最初は「乞食道楽」(『日本人』第6-9号1894.1.3-2.18)なのだ。1894年の発表ということは日本語訳ホームズのほうが『時務報』の漢訳よりも2年先行する。

どちらが先かというどうでもいいような事柄だ。しかし中国人研究者はなぜかしらこのことをとても気にしているらしい。漢訳が日訳よりも早かったと書く。私も事実が異なることをそのたびにいいたいくなる。

以下はまとめて掲げる。中国の研究者がどれくらい阿英目録を信奉しているかよくわかるだろう。途中で樽目録第3版を挿入する。阿英の記述は誤りだとはっきり説明した。中国人研究者が日本語を理解しないのであれば間違ってもしかたがないか。そうは思わないが。

1994陳鳴樹[大典18]は(英)柯南道爾著、丁楊杜訳とする

1996鄒振環[振環248]丁楊杜^譯社^譯訳^譯

1999馬祖毅[祖毅713]署「時務報館訳^譯、丁楊杜訳^譯」1897^年

★2002樽目録第3版。時務報館訳、丁楊杜訳とするのは誤り—————

2002陳大康[編年79]署「時務報館訳、丁楊杜訳^譯」光緒二十五年

2004葛桂録[中英116]著訳者不記

2007杜慧敏[慧敏411]時務報館訳^譯、丁楊杜訳^譯

2008劉永文[劉晚360]時務報館訳^譯、丁楊杜^譯訳^譯とする

2012張 曉[漢訳2327](英)達爾著 曾広銓訳、昌言報館 光緒25(1899)、1冊(与長生術合函)

2012張 曉[漢訳2328]木刻以外は、阿英目録をそのまま引用して誤る、細目あり

2014陳大康[編年②426]三種合印本、扉頁題「己亥夏、素隱書屋托昌言報館代印」、2018[大康18-811]同左。光緒二十五年四月但日期不詳

2015陳海波[現史①33]署「丁楊杜訳^譯」と誤る、1899、細目あり

2015陳海波[現史①122]柯南道爾著^譯、1899、均署「時務報館訳^譯、丁楊杜訳^譯」と誤る。細目あり

陳大康は2002年に先行目録にもとづいて誤記した。そののち実物を確認のうへ2014年には訳者を記述していない。訂正したと考えていまいだろう。

劉永文は樽目録第3版を見ている。だが日本語部分をとばした。ほかの研究者と同様に誤りから逃れることができなかった。

張曉の『近代漢訳西学書目提要 明末至1919』については後でも述べる。ここには同名の単行本が2種類掲げてある。後者の[漢訳2328]が阿英目録を引き写したというだけで充分だ。

前者の[漢訳2327]は上記のように説明はある。だが詳細がよくわからない。おもしろくもあり不可解でもある。なぜなら、こちらの『新訳包探案』は、『長生術』と合冊されているらしいからだ。『長生術』はたしかに(英)解佳(ハ

ガード)撰、曾広銓訳で最初は『時務報』と『昌言報』に掲載された。その後素隠書屋が昌言報館に印刷を依頼して刊行されている。それと合体されているのは理解できるにしても、こちらの『新訳包探案』も曾広銓訳というのが納得できない。もとは張坤徳訳ではないのか。不明のままに残しておく。

後に別の手がかりが出てきた。

鄒瑞珩「《巴黎茶花女遺事》的影響」と題して袁進主編『中国近代文学編年史：以文学広告为中心(1872-1914)』(北京大学出版社2013.5)にある。『遊戯報』の広告を下のように掲載している。

2013鄒瑞珩[広告1-84]「現与新訳包探案長生術二種合印出售每部白紙値洋一角竹紙値洋二角五分」『遊戯報』1899.6.3昌言報館代白

著者訳者は書かれていない。ただし『新訳包探案』(ARTHUR CONAN DOYLE の SHERLOCK HOLMESもの)と『長生術』(HENRY RIDER HAGGARD “SHE” 1887)の2種類を合冊にして刊行された。張暁が目録に並置したのはこの合冊本であるらしい*82。

張治を紹介するまえに、前出任翔、高媛主編『中国偵探小説理論資料(1902-2011)』(2013)に触れておく。

2013任翔ら[偵探587]時務報館訳⁷⁷、丁楊杜訳⁷⁷

従来通りに誤る。新しい発見があるかと思えば間違いもある。混淆しているという。

初出『時務報』目次に桐郷張坤徳訳「域外報訳」とあるのが手がかりだ。雑誌連載を1冊にまとめて単行本で刊行した。ゆえに訳者は張坤徳だと考えるのが普通だろう。阿英はそれを勘違いしたものか「時務報館訳」としてしまった。

もうひとりの「丁楊杜」は文明書局の発行者だ。ここは完全に阿英の誤解である。訳者をふたりにしたのも奇妙なことだ。

『新訳包探案』の関連写真を掲げる。見ればわかる。単行本には原作者と訳者の名前は記載されていない。





孔夫子旧书网より

お待たせしました。張治の説明を紹介する。

2012張治[張治A45]到1899年，上海素隱書局出版單行本《[㊦]新訳包探案》時，訳者却署名為“丁楊杜[㊦]”，有研究者懷疑，可能是幾個人合訳的。

ここを見ると私の首は自然にかしぐ。示した写真を見てほしい。張治の説明ではまず書名が違ふ。素隱書局版には「新訳」がついている。また丁楊杜と署名があるかのように説明している個所も事実ではない。

張治は阿英目録を引用しているだけだ。素隱書局の単行本に訳者について「丁楊杜」と署名している。そうたしかに書いている。しかし阿英の名前をださない。すると彼が実物で確認していると読者は思うだろう。その結果が訳者複数説だ。複数共訳説を誰がいうのか。名前をふせるのはなぜか。奇妙なはなしだ。

確認する。丁楊杜訳とするところからして間違いだ。すぐにわかる。文明書局本の奥付写真も掲げたとおり丁楊杜は発行者だ。あきらかに事実と反する。

私がもうひとつ問題だと考える理由はこうだ。

張治は該書に掲げた主要目録11種の末尾に樽目録第3版を掲げている(序論11頁)。参照したと誰でも考える。それ以外に理解のしようが

あるだろうか。

上に何度も示した。樽目録第3版は「時務報館訳、丁楊杜訳とするのは誤り」と明記している。ところが張治はあいかわらず「訳者について「丁楊杜」と署名している」と説明する。これはなんだろうか。樽目録第3版を参照したと書きながらまったく参照していないではないか。いや参照したかもしれない。日本語が理解できなかったか。たとえ理解したとしても結局のところ正しい記述を無視するのだ。そうして誤りをくり返す。

それくらいに阿英目録は絶大な信頼性を獲得して現在にいたっている。そうとしか考えられない。

張治ついでに彼の著作に興味深い箇所があるのを指摘する。

次はシェイクスピアだ。

罫

【注】

- 80) 中村忠行説「清末探偵小説史(1)」『清末小説研究』第2号1978.10.31.11頁
- 81) 郭延礼のこの論文は、次の著書に吸収されている。郭延礼『中国近代翻譯文学概論』漢口・湖北教育出版社1998.3.修訂本 武漢・湖北教育出版社2005.7第二版第三次印刷
- 82) 『新訳包探案』の合冊本といえ、[文序5]光緒二十五年1899正月、不久、素隱書局將『巴黎茶花女遺事』与『新訳包探案』合為一書出版、などとある。

次号の公開は2020年4月1日を予定しています

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

『環瀛誌險』の原作

沢本香子

はじめに

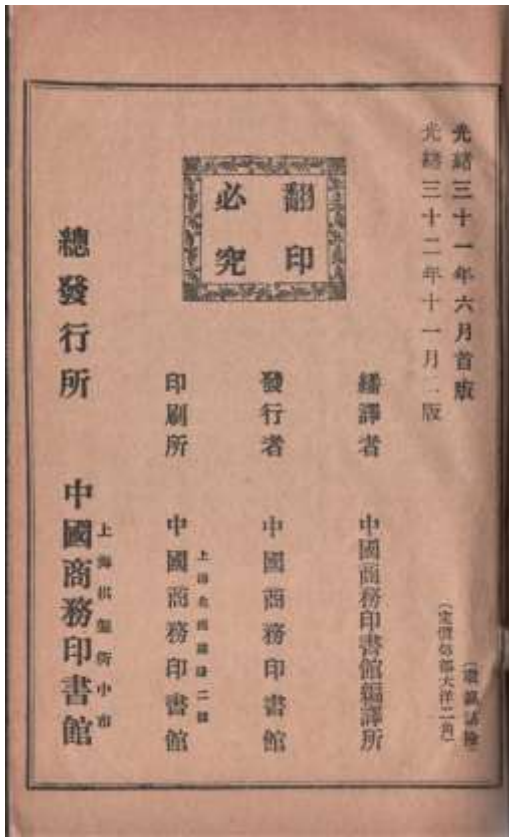
奥国維也納愛孫孟著、訳者名不記「環瀛誌險」という漢訳小説がある。『繡像小説』第5・25期(癸卯六月初一日[1903.7.24]-刊年不記)に連載された。

該誌第25期には発行年月日の記述がない。もとは半月刊の予定だった。しかし刊行が遅延気味で第13期より刊年を記さなくなる。それを知らない人は先行文献を引用し連載完了を甲辰四月初一日(1904.5.1)と書く。正確ではない。該誌第25期は当時の複数新聞に掲載された発行広告にもとづけば実際の刊年が推定乙巳1905正月になる。こちらの方が事実に近い。予定よりもはるかに遅れている。ただし「環瀛誌險」についていえば刊行の遅れは問題ではない。

雑誌連載が終了して単行本『環瀛誌險』(上海・中国商務印書館1905)*¹になった。奥付に「繙訳者 中国商務印書館編訳所」と明記する。雑誌初出は訳者名不記だったのを変更したわけだ。といっても個人名ではない。編訳所と表記するのは実質不記名と同じことだ。

単行本が出たのは連載終了(推定乙巳1905正月)の後すなわち(1905)旧暦六月である。時間的な矛盾はない。





『環瀛誌険』の評判

版元の商務印書館は積極的に新聞広告を出した。『環瀛誌険』を新出小説のひとつに掲げる。西洋の冒険家が証言したことを編集し翻訳したと解説する。その内容は「全12篇は水害火災盜賊、野蛮人凶悪野獣など種々の普通ではない冒険であり、ないものはない〔共十二段、凡水火火盜賊、蛮人凶獸、種種奇険、無不備具〕」*2。

宣伝文句だから簡潔に全体の傾向を述べる。外国の冒険家が実際に体験した物語であることを強調する。中国人にはない冒険精神と書いて刺激してみせるのも広告だからだ。いうまでもないが『環瀛誌険』を1冊のまとまった漢訳小説としてあつかう。単行本だからまぎれもない1冊本だ。

のちに読書録のひとつにも採録された。顧燮光「訳書経眼録」では書名を『環瀛遇険』と誤るにしても取り上げるほどに興味深かったということだ。西洋人が危険に遭遇した状況を描い

て尋常ではないと説明する*3。

顧燮光が見たのは単行本ではないだろう。

「繡像小説本」とするから雑誌連載を指す。だから訳者を「繡像小説報訳」と書く。単行本を見ていたら中国商務印書館編訳所訳としたはずだ。雑誌には訳者が書かれていないから推測したらしい。それとは関係なく漢訳の出来がいいと感心しているのは正直なところだ。

商務印書館は新聞においても販売宣伝に力をいれた。それなりの評判も得られている。だが今に至るも残された課題がある。

その原作が不明であることが大きな問題だ。研究者が『環瀛誌険』という書名に言及することはある。だが漢訳を示して原作との比較対照をしない。原作不明のままだからそれができないのも当然だ。

清末時期の翻訳は原作者、原作を記さないものが少なからずある。原作特定は翻訳小説研究の出発点だ。そこからして不確かな部分が残っている。だからこそ困難がつきまとう。

『環瀛誌険』についてはさいわいに「奥国維也納愛孫孟著」と明記される。オーストリア・ウィーンの人であるらしい。それくらいの地名はわかる。しかし原作者愛孫孟は誰なのか。原作は何か。現在でも数多く存在する原作不明作品のひとつであり続けている。本稿ではそれを追究する。

考察のいろいろ

前に示した単行本『環瀛誌険』を簡単に説明する。

『繡像小説』連載の別刷りをまとめた体裁だ。雑誌が線装本で別刷りもそうになっている。表紙、扉、目次、奥付、各種教科書広告をつけて1冊である。「定價每部大洋二角」とあるから市販した。抽印本といていい。ただし挿絵は収録していない*4。また題名を変更している作品が3篇ある。そこだけが初出とは違う。

その扉を見る。これは商務印書館の「説部叢

書」そのものだ。右側に「説部叢書／第〇集第〇編」と表示すればそのまま元版が成立する。中国商務印書館と表示するのほかの「説部叢書」と共通している。しかし「説部叢書」に編入されることはなかった。理由はわからない。



扉

『環瀛誌』に収録された作品を読む。

12篇のそれぞれに西洋人の探検冒険体験が具体的に記述されていることはわかる。時間、地名、人物名が詳細であることに気づく。同時にかすかな不審を感じる。年月日を明記してもそれに読者は興味を示すだろうか(後述)。

時間表現は漢訳してもそのまま理解できる。だが人名と地名はむづかしい。外国語を音訳した漢語だから少数を除いて原語を想像するのが困難だ。欧米の著名人でもいくつもの異なった音訳表記がある。まして知らない人名を漢訳で示されてもわからないのが普通だろう。

表記を見る限り前述のとおり該書の著者はオ

ーストリア・ウィーンのアムンツという人だ。

ドイツ語なら Wien か。それとも英語の Vienna なのか。漢訳は維也納だから Vienna を音訳したものと考えていいだろう。どちらにせよウィーンであることに変わりはない。まさかこちらにも人名ということはないだろう。人名を漢訳するばあい姓名の順に入れ替えることが多い。そうならない維也納は地名である。

アムンツは音訳だからアイゼンマン (Eisenmann または Isenmann) のような気がする。そう目星をつけた。しかしオーストリア文学史などを調べても該当する作家を探し当てることができない。一般の文学辞典などに採録される作者ではないらしい。辞典に出てくる人ならばとつきの昔に誰かが指摘しているだろう。謎を究明することはかなりの困難をとまなう予感がある。

書名の『環瀛誌』を見る。

環瀛(瀛環でも同じ)が WORLD であるから後半は ADVENTURE STORY あたりか。複数あるから STORIES かもしれない。あるいは ADVENTURE WORLD か。つまり日記すれば『世界冒険譚』あるいは『世界探検物語』になりそうだ。しかしそれに類した書名でオーストリア作家の刊行物を探しても一致するものがない。そういう事実が出現するから困惑をおぼえる。

オーストリアの作家であれば原作の使用言語はドイツ語なのだろう。ドイツ語原作で当時漢訳された作品は少なくない。英語あるいは日本語経由というものも見受けられる。そうすると『環瀛誌』もそういう種類の作品だろうか。

日本語翻訳でもそれらしいものが見当たらない。ウィーンが Vienna で英語となると焦点が合うようではかえって視界が曇ってしまう。まるで雲をつかむような話だ。

作品そのものをもう少し詳しく見るほかない。

全体の印象

本稿では単行本『環瀛誌』収録の作品全12

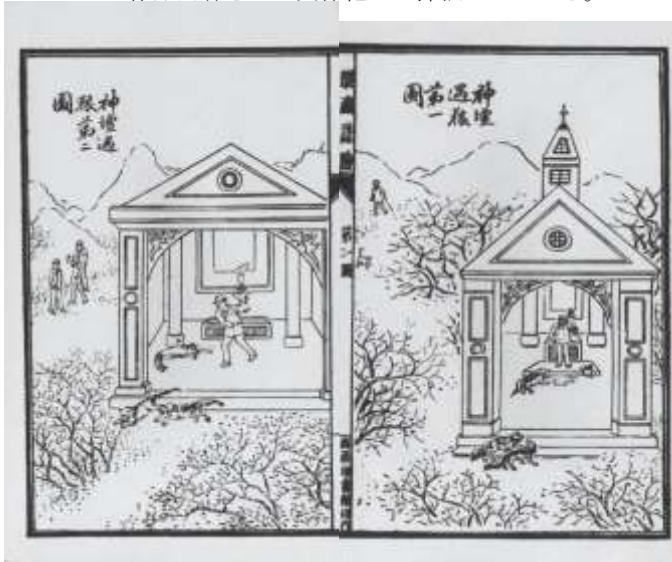
篇に数字を振る。

最初の物語は狼との戦いだ。舞台となった場所に注目して要約する。

1 「神壇闘狼」 オーストリア (奥大利 Austria)。クリスマス前に祭事の準備をしに礼拝堂 (原文: 小教院) へ行った寺男 (祝司) が3頭の狼に襲われる。祭壇 (神壇) に登り防御した。

漢訳題名が「祭壇で狼と闘う」だ。物語そのものを表現していてわかりやすい。

『繡像小説』ではこの作品にのみ2葉の挿絵 (繡像) がついている。礼拝堂らしき内部で男性が狼3頭に追いつめられている場面だ。2葉目は狼1頭を倒し残りは撃退したところを描く。作品内容をほぼ具体化した挿絵だといえる。



『繡像小説』挿絵

『繡像小説』の挿絵は遠くから全体を眺める手法を基本的に採用している。複数あるいは集団の人々を離れた場所から見る視線だ。人物に接近しない。人の身体を部分的に特別大きく描くということもない。全体に穏やかな印象を与える。それが挿絵の方針ようだ。

それにしても礼拝堂の中では狼と闘っているのに外をステッキを持った男性が歩いているのはどうか。途中で見失った飼犬が描かれてい

るのは時間的に前後するものを1画面に収める手法なのだろう。しかしどうも緊張感に欠けている。また2葉目では礼拝堂にもとからあるはずの尖塔が消失した。描き忘れたらしい。まわりを囲む樹林の様子も違う。雑誌編集者は気づいたが何も言わなかったのか。「挿絵 [繡像]」を看板にした小説専門雑誌であるにもかかわらず少しいい加減な仕事だと思う。

作品の舞台がオーストリアで作者がウィーン人だ。しかも挿絵2葉を冒頭に配置する (単行本には収録しない)。ほかの作品には挿絵は添えられていない。その2葉の挿絵で漢訳全体を代表させているように思える。

そもそも総題名「環瀛誌険」の次に配置しているのが著者名の奥国維也納愛孫孟だ。物語12篇が各章あつかいで続く。その順序に記述されているから愛孫孟が作品全体の著者である。そうとしか考えようがない。

くり返す。『環瀛誌険』という1冊の書物に12篇の探検冒険物語が収録されている。それぞれの作品に作者名はない。必然的に愛孫孟が全体の著者ということになる。

そういう体裁は別に珍しいものではない。特別なものではなく普通にある。どこから見ても愛孫孟著の単行本1冊だ。原本をそのまま漢訳したと思う。

不審に感じる

2以下の各作品について探検冒険が発生する場所を中心に内容を略述する。4文字で統一した題名が内容を示していることがわかるだろう。

2 「探穴遇水」 モーリシヤス (馬列協 Mauritius)。近く of 山へ洞穴探検に出かけ増水で死に瀕する恐怖を体験する。

3 「估客逢兇 (初出は遠商嬰険)」 アフリカ・ガボン (高彭 Gaboon)。1883年10月。商品販売のため僻地へ川を小船で向かった。村民の集団に襲撃され首を落とされかかったが従者に

よって救助された。

4 「林遊遇火」インド(印度 India)茶園。冬12月28日、イギリス人姉妹が森林を馬で通過中、大火災に遭遇して周囲を囲まれる。

5 「山行陥穽」ボスニア(勃士尼亞 Bosnia)。ドイツ人科学者シュミット(許米德 Schmidt)は山中で熊用の罠にはまり死にそうになる。罠が結ばれた大木をナイフで切って脱出した。

6 「遠叟遇盜」トルコ(土耳其 Turkey)。1896年10月31日付『タイムズ』紙報道。イギリス軍人が通訳を雇って狩猟へ行く。山賊に襲われ身代金を要求された。

7 「獅口余生」アフリカ(墨蝦訥蘭 Mashonaland)。1896年。アフリカで電柱敷設工事に従事する。ベッドの下にライオンがいる。

8 「遠遊苦況(初出は克遊記險一鳥立福女史自述)」アラスカ・クロンダイク(阿拉斯加・克朗滌克 Alaska Klondike)で金探し。

9 「泗海失援(初出は入海遇險)」地中海(地中海 the Mediterranean)。1896年9月。イギリス軍艦から海底に沈んでしまった水雷を回収する。

10 「良医殉術」オーストリア・ウィーン(奧大利・維也訥 Vienna)。インドで疫病が流行した。ウィーン大学の医師が派遣され3カ月の医療行為を終わり帰国する。

11 「煙突失墜」コペンハーゲン(哥彭赫 Copenhagen)。画家志望の女性があこがれの画家に会いに彼女のいる屋敷を訪問する。探して部屋を巡っているうちに誤って煙突の中に落ち込んでしまった。

12 「墜崖折脛」オーストリアのアルプス(阿爾魄斯山脈 Austrian Alps)。1899年夏。19歳の少年が登山中に負傷してしまう。

以上をながめると奇妙な気がしてしかたがない。1冊まるごとオーストリア人作家愛孫孟の作品集だと考えているから違和感が強い。

そこを説明する。

オーストリアが舞台の作品があるのは当然だと思う。原作者の愛孫孟はウィーン人だからだ。しかしアフリカ、ボスニア、トルコ、アラスカ、地中海、コペンハーゲンと地理的範囲が広がるのはどうか。

発生する時間が1883年から1899年の幅がある。しかも各作品の主人公が商人、イギリス人姉妹、ドイツ人科学者、イギリス軍人、女性の金発掘者、海軍軍人、医者、女性画家、少年など各種各様であるのもしっくりこない。統一性がないからだ。総題名のもとに収録される連作であれば主人公をひとりに設定したほうがまともが出るはずだ。小説執筆の基本だろう。

探検冒険という視点で各篇をまとめたとしてもここまで内容がバラバラだと散漫な印象しか残らない。著者はそれを意図していたといわれればそうかと思う。だがやはり落ち着かない。そうすると愛孫孟はいくつかの物語を集めた編集者ということだろうか。そうならば最初に「著」と示している事実と矛盾する。

手がかりがなさそうで不明確な状態のままが続く。

ひとつの作品に目をとめる。

手がかり

「6 遠叟遇盜」である。イギリス軍人がトルコで趣味の狩猟に出かけた。山賊に拉致され人質となる。題名を訳せば「遠く狩りにでかけて強盗に遭う」だ。簡潔な内容説明になっている。

注目する理由は1896年10月31日付『タイムズ』紙報道という記述があるためだ。冒頭部分を引用する。

一千八百九十六年十月三十一日。泰晤士報載有土耳其軍拘英吏事。曰。十月三十日君士坦丁路透電曰。諾福克隊長馬立德約翰為亞定地潘命鼎軍士所拘。勒贖一万五千鎊。按馬立德兄斯多買克城比乞斯營郡司。頗有

名。

1896年10月31日付『タイムズ』紙にトルコ軍がイギリス将校を拘留したとの報道がある。それによれば「10月30日、コンスタンティノープルのロイター電が報じて「ノーフォーク隊長ジョン・マリオットが亜細地藩命県の下士官に拘留され15,000ポンドの身代金を要求されている。マリオットの兄は斯多買克城比乞斯營の長官で有名だ」という」

トルコ軍(土耳其軍)としているがこれは誤解だ。後ろの部分を読めばジョン・マリオット(馬立德約翰は姓名の順)を捕まえたのは山賊だとわかる。標題もそうなっている。だいいちトルコ軍が休暇で狩猟を楽しんでいるイギリス人将校を拘留するだろうか。そのうえで身代金を要求するというのでは筋が通らない。

「君士坦丁」はコンスタンティノープル(Constantinople)だ。トルコ語で現在のイスタンブール。

漢訳のままに残した「亜細地藩命県」はトルコの地名だろう。同じく「斯多買克城比乞斯營」もイギリスの固有名詞だが双方ともに具体的にどこを指しているのかは不明だ。

小説作品にしては現実の新聞紙名がでてくるのが珍しい。実在する報道を織り込んだ小説というのもあるだろう。年月日と地名がへんに詳細だ。気になる。読者からすればそこはとぼして読む箇所だろう。別の視点からいえば原文が新聞報道だから日時と場所が詳しく記載されているわけだ。

新聞報道

鍵語は1896年10月31日(October 31st 1896)、『タイムズ(The Times)』、ノーフォーク(Norfolk)、ジョン・マリオット(John Marriott)、トルコ(Turkish)などになる。

同一年月日の新聞記事が見つかった。ただし

『タイムズ』紙ではない。



DAILY MAIL

1896年10月31日付『デイリー・メール DAILY MAIL (LONDON)』だ。「身代金10,000ポンド/イギリス将校、山賊に捕まる RANSOM £ 10,000 / ENGLISH OFFICER IN THE HANDS OF BRIGANDS.」とある。

冒頭部分を見る。

An Ipswich correspondent states that news has been received there of the capture of Captain John Marriott, of the Norfolk Regiment, brigands in Smyrna.

イプスウィッチ(注:イギリスの地名)の特派員はジョン・マリオット大尉(ノーフォーク連隊)がスミュルナ(注:西トルコの港市)において山賊集団に捕まったとのニュースを受け取ったと述べている。

Captain Marriott is a brother of Major C. Marriott, of the Beeches, Stowmarket, and is well known in that town.

マリオット大尉はC・マリオット少佐(在ストウマーケットのビーチェス)の弟でありその町ではよく知られている。

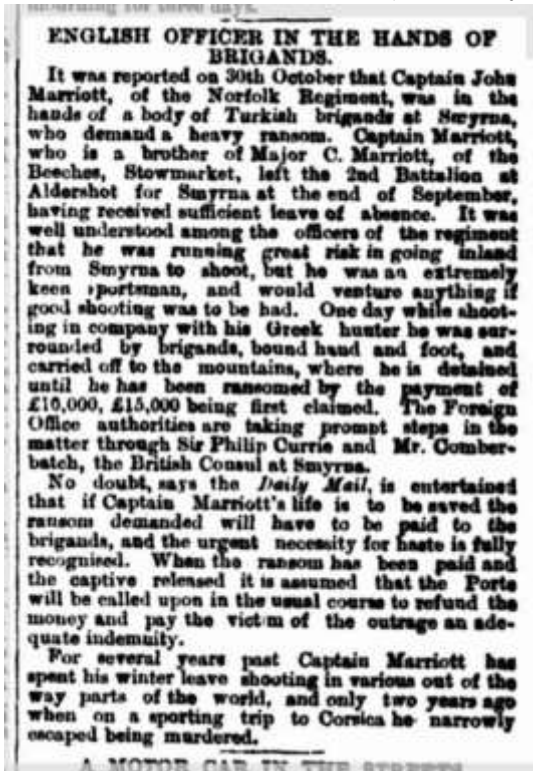
誘拐事件が発生したという報道だ。実話であった。速報であるらしくその後の経過については記事がない。

漢訳が兄マリオットについて「斯多買克城比

乞斯營」と書いて不明だったのは Stowmarket (スド買克) と Beeches (比乞斯) のことだった。

もうひとつの「亜定地潘命県」については上のニュース原稿には記載がない。別の文献にもとづいたのだろう(後述)。

少し遅れてオーストラリアでも報道された。



THE SYDNEY MORNING HERALD

1896年11月16日付『シドニー・モーニング・ヘラルド THE SYDNEY MORNING HERALD』に「イギリス将校、山賊に捕まる ENGLISH OFFICER IN THE HANDS OF BRIGANDS.」という記事が出ている。

It was reported on 30th October that Captain John Marriott, of the Norfolk Regiment, was in the hands of a body of Turkish brigands at Smyrna, who demand a heavy ransom.

10月30日、ノーフォーク連隊のジョン・

マリOTT大尉がスミュルナにおいてトルコの山賊集団に捕まり多額の身代金を要求されたと報じられた。

Captain Marriott, who is a brother of Major C. Marriott, of the Beeches, Stowmarket, left the 2nd Battalion at Alderhot for Smyrna at the end of September, having received sufficient leave of absence.

C・マリOTT少佐(在ストウマーケットのビーチェス)の弟であるマリOTT大尉は十分な休暇を取り9月末にアルデラホットの第2大隊を離れスミュルナへ向かった。

別の新聞記事が出てきた。

ANOTHER KIDNAPPING CASE. BRITISH OFFICER CAPTURED BY BRIGANDS.

An Ipswich correspondent states that news has been received there of the capture of Capt. John Marriott, of the Norfolk Regiment, by brigands in Smyrna. Captain Marriott is a brother of Major C. Marriott of the Beeches, Stowmarket, and is well known in the town. He went out on a visit to Mr Eppstein at Smyrna, and a few days ago, with his Greek hunter, had a day's shooting. Suddenly he was surrounded by brigands, bound hand and foot, and carried off to the mountains, where he is detained until he has been ransomed by payment of £10,000.

Official information has been received at the Foreign Office confirming the substantial accuracy of the reported capture. The relatives of the captive were in London on Friday, and made a statement on the matter to the Foreign Office authorities, who are taking prompt steps for remedy through Sir Philip Currie and Mr Chamberlain, British consul at Smyrna. It appears that, in the first instance, the brigands demanded ransom to the extent of £15,000, but later reports put the sum at £10,000. No further details are at the present moment available.

The British Consul at Smyrna is endeavouring to obtain the release of Captain Marriott, who was seized by brigands.

ABERDEEN WEEKLY JOURNAL

1896年11月4日付『アバディーン・ウィー

クリー・ジャーナル (ABERDEEN WEEKLY JOURNAL)』掲載の「誘拐の別事件/イギリス将校、山賊に捕まえられる ANOTHER KIDNAPPING CASE./BRITISH OFFICER CAPTURED BY BRIGANDS.」という。

3本の新聞記事は固有名詞にすこしの違いがあるだけで内容はほぼ同じだ。マリオット大尉がトルコで山賊に捕まり身代金を要求されている。その部分は共通する。

当時報道されたイギリス関係で目立つニュースのひとつだった。

漢訳「6 遠叟遇盗」の原作が実話にもとづいているというのがひとつの手がかりとなる。

『ワイド・ワールド・マガジン』のこと

ここまで材料が集まった。それにもとづいて探索するだけ。原作に出会うのは時間の問題だった。

たどりついたのが『ワイド・ワールド・マガジン THE WIDE WORLD MAGAZINE』である。

日訳すれば『広大世界雑誌』となるのだろうか。かといってわざわざ日本語に翻訳したものは見かけない。1898年にロンドンで創刊し1965年まで刊行された月刊誌だ。

そのうたい文句は「事実は小説より奇なり TRUTH IS STRANGER THAN FICTION」だ。詩人バイロンの言葉だという。

写真と挿絵を多数掲載するのが特色である。それは話題の主である実体験者の肖像写真だったりする。探検であれば現地の写真だ。冒険であれば場面を再現する挿絵が添えられている。小説よりも奇妙な事実の数々が展開していく。それを雑誌の売り物にした。たとえばイザベラ・バード (Isabella Lucy Bird, 1831-1904) にインタビューして極東旅行時に撮影した多数の写真を掲げている (Mrs. Bishop. "Snapshots in the Far East." Vol.1 No.4, 1898.8. pp.428-436)。

前に探検冒険の発生した年月日、地名を詳細に記述するのは不思議だと書いた。そこまでするのは小説ではなく事実だと強調する必要があったからだとわかる。雑誌の性格をひとことでいえば探検冒険怪奇実話雑誌となる。

ついでながら版元はジョージ・ニューズ社 (GEORGE NEWNES LTD.) だ。コナン・ドイルのシャーロック・ホームズものを掲載しても有名な雑誌『ストランド・マガジン THE STRAND MAGAZINE』 (1891-1950。漢訳して『海濱雑誌』という) を刊行している。

私がウェブで見つけたのは月刊誌の合冊だ。その第4巻第19-24号 (1899.11-1900.4) には目次地図が複数枚ついている。雑誌の傾向をよく表わしていると考えられる。その1枚を示す。



目次地図

雑誌に収録した実話はどこで起こったのか。その具体的な発生場所を世界地図に記入したものが明白だ。地図は事実であることを強調する役割をはたしている。その目次地図の欄外には「子供たちに指し示すように」と説明するものがある。親子で閲覧することを想定した。教育効果を狙っている。

「6 遠叟遇盗」の原作

『ワイド・ワールド・マガジン』の第2巻第9号 (1898.12) に掲載されている。エラム・

フェンウィック・アラン (ELLAM FENWICKE-ALLAN。本名はMRS CHARLTON ANNE⁹⁵) 作「山賊に捕まって IN THE CLUTCHES OF BRIGANDS。」がそれだ。

ひとこと述べる。イギリスの古書店より該当作品だけを入手した。目録を見て注文したのだ。その記述から抽印本だと思った。別刷りにして販売する抽印本は『繡像小説』でもあることは前述した。



抜き取り本

手元に届いたのを見れば販売を目的にした抽印本ではなかった。表紙もなにもない。ただ単に実物雑誌から該当作品を切り離して抜き取っただけ。新聞連載小説を切り抜いて綴じた私家版は日本で見たことがある。しかしこのイギリスのもののような抜き取りははじめて見た。冊子でさえない。類似例をいえば動物植物図鑑の絵図頁を切り取って(額縁に入れて鑑賞するため

に) 別売りするやり方である。これを見て思うのはこの種の作品抜き取りが売れるくらい人気があったということだ。

ついでに奇妙なことがあることを書いておく。該当作品を収録しているはずの Internet Archive 本には落丁がありその部分(337頁以降)が欠落している。まさかその欠落の一部分が私の入手したものではないだろう。もうひとつ。該当作品を収録する google ブックスとはページ数が一致しない箇所がある。不可解なことだ。

さて冒頭ページの右下に掲げられた肖像写真が物語の主人公ジョン・マリオット大尉だという。軍服ではないから印象が異なる。拘束事件を写真で示すわけにはいかない。ゆえに題字の背景ほかに挿絵を掲げた。証言に基づいて描かれたもの。

書き出し部分を次に示し日訳をつける。

★二字サゲ/止め

【英文】 IN the *Times* of October 31st, 1896, the following appeared, under the heading, “British Officer Captured by Turkish Brigands” : —

A Reuter telegram, dated Constantinople, October 30, says: “Captain John Marriott, of the Norfolk Regiment, has been captured by brigands in the district of Budrun, vilayet of Aidin. The brigands demand a ransom of £ 15,000.” Captain John Marriott is the brother of Major C Marriott, of the Beeches, Stowmarket, and is well known in that town.

1896年10月31日付『タイムズ』は「トルコの山賊によって捕らえられたイギリス人将校」という見出しの下に次のように報道した。 : —

10月30日付コンスタンティチノーブルのロイター電は次のように述べている。「ノーフォーク連隊のジョン・マリオット大尉

はアイディンのブドラン地区において山賊に拘束された。山賊は身代金15,000ポンドを要求している」。ジョン・マリオット大尉はC・マリオット少佐(ストウマーケット・ピーチェス)の弟でありその町ではよく知られている。

前に疑問として残しておいた。マリオット大尉が捕まった場所だ。トルコの「亜定地藩命県」という。原文を見て問題が解決する。Budrun(藩命), vilayet(トルコの州) of Aidin(亜定)である。

『環瀛誌陰』所収「6 遠叟遇盜」の原作であるのは間違いない。

ひとつの原作が明らかになった。あとは同じ雑誌の掲載作品だろうと予測がつく。

「1 神壇闘狼」の原作

漢訳冒頭の作品を見る。原作は LOUIS H. EISENMANN, OF VIENNA. "A FIGHT WITH WOLVES ON THE ALTAR." (*THE WIDE WORLD MAGAZINE* vol.3 no.14 1899.6, pp.213-217) である。ウィーンのルイス・H・アイゼンマン作だ。「祭壇で狼と闘う」と題する。

原作の著者表記を見て漢訳の意味がわかる。すなわち「奥国維也納愛孫孟著」は EISENMANN, OF VIENNA を直訳したものだった。普通は国名の「奥国」を示すだけで終わる。だが原文にウィーン VIENNA があるから漢訳では忠実に維也納と翻訳した。

冒頭部分の英語原文と漢訳を引用する。

【英文】ALTHOUGH in most provinces of Austria wolves have been nearly exterminated, yet in Hungary—in the Bukovina and Eastern Galicia—they are still common enough, despite the fact that there also every effort is made to get rid of

the brutes, and they are eagerly hunted.

オーストリアのほとんどの地域ではオオカミはほぼ絶滅した。しかしハンガリー・ブコビナと東ガリシアーではまだ十分に多かった。駆除するためにあらゆる努力がなされ、また事実熱心に狩られているとはいえだ。

【漢訳】奥大利諸省。幾無狼。然匈牙利地。若巴開維納。若東軋利巫。驅剪雖勤。而狼殊夥。

オーストリアの多くの地域では狼はほとんどいない。しかしハンガリーのブコナビとか東ガリシアーでは駆除に努めているとはいえ狼ははなはだ多かった。

漢訳は英文を十分に把握し簡潔に漢訳している。地名を省略することもない。原文の音をよく捉えている。

狼に襲われる主人公についての描写についても少し引用したい。

【英文】Stanislaus Bruhs is a man of about thirty, who besides being sacristan at the Drobycze parish church, has also the duty of attending to a little church, or more properly speaking a chapel, about two English miles from the village.

スタニスラウス・ブルースは約30歳の男性だ。ドロビッチ地区の教会で寺男を勤めるほかに村から2マイル離れたところにある礼拝堂というほうがより適切な小さな教会を維持する責任があった。

【漢訳】白魯斯年約三十。給事特落弼士教院。為祝司。距村二里。有小教院。白亦兼治其事。

ブルースは年齢が約30歳である。ドロビッチ教会で寺男を勤めており村から2里離れたところにある礼拝堂(小さな教会)も兼任していた。

漢訳していない箇所はない。ほぼ直訳といっ
ていいだろう。上質な翻訳だと思う。

漢訳そのものとは違うが原作の挿絵が躍動的
で緊張感にあふれているところを見てほしい。
『繡像小説』の絵図とはまったく異なる。



『繡像小説』の繡像は静的だ。その原因のひ

とつは作業を分担しているからだろう。漢訳者
は翻訳するだけ。雑誌そのものを『繡像小説』
の編集者に見せていないのだと思う。絵師も原
画を見ていない。編集者が物語の内容を説明す
る。それを聞いて（漢訳を読んだかどうかは不
明）自分の従来からの手法にのっとり想像力
を使って絵筆を走らせた。そういう状況だったと
推測する。以上のように考えるのは原作原画と
『繡像小説』の挿絵が遠く離れているからだ。

漢訳者について

初出の『繡像小説』では訳者名は不記である。
単行本になって奥付の表示が中国商務印書館編
訳所と明記された。

漢訳を見れば訳者は英語に堪能な人物だとわ
かる。しかも『ワイド・ワールド・マガジン』
の合冊本を3巻まで、あるいは雑誌本体を所有
している。またはそれらを所蔵するところ（た
とえばあるとして商務印書館編訳所図書館涵芬
楼）で読んでいる。商務印書館編訳所に勤務す
る人物であればそれも可能だったかもしれない。
しかも月刊の雑誌から興味のある作品を抽出す
るだけの判断力と編集能力を備えていたとい
うことでもある。

それほどの語学力と学識を備えた人物は当時
の上海でもそう多くはいないだろう。ただし商
務印書館編訳所という名称から個人名を特定
することはむづかしい。編訳所に所属する人物
であるかどうかはわからない。編訳所名を使う
翻訳は外部から持ち込まれた原稿を買い上げた
ものといわれる。

『繡像小説』掲載の翻訳作品は原作者を明示
するものしないものが混在している。「華生包
探案」はドイルのホームズものだが原作者も訳
者も記述しない。一方で「斥侯美談」は「科楠
岱爾著（日）高須梅溪訳意 中国錢塘吳禱重
演」とドイル名を出す。「アラビアン・ナイト」
は訳者不記だ。扱いが一定しているわけではない。

『環瀛誌陰』に関してどうしてもというのであれば謝洪資牧師(商務印書館編集者、のちに株主)がいる。英語教科書『華英初階』『華英進階』の編集注釈でも有名である。商務印書館が印刷業から出版界へ進出する契機となったほど評判になった。営業的に発展拡大する基礎を作った。それくらいよく売れた教科書だ。

山陰謝鴻資訳意、嘉定徐少范述文「西訳雑記卷一」が『繡像小説』第6期(癸卯六月十五日(1903.8.7))に掲載されている。謝鴻資は謝洪資と同一人物だ。その記述を見ると謝鴻資が口述翻訳し徐少范が文章に書いた。林訳方式と同じことになる。

ひとつの手がかり、資料がある。『環瀛誌陰』と「西訳雑記卷一」の漢訳2作品を並べて記録する目録のことだ。

趙景深の蔵書だった。その目録には次のように書いてある。

環瀛志陰 不分卷／(奥)愛孫孟撰。民国間商務印書館鉛印本 一冊 附：西訳雑記口卷 存第一卷 (清)謝鴻資、徐少范訳述^{*6}

民国時期に刊行された鉛印本だという。刊年からして趙景深旧蔵書の該版本は私の所有する商務「光緒三十一年六月首版/光緒三十二年十一月二版」とは違う。そういう版本もあるらしい。中華民国になって商務印書館が刊行した該作品は未見だ。趙景深の旧蔵書にあったものとして話を進める。

目録で注目するのは「附」以下に「西訳雑記」を一緒に記入している箇所である。

「附」とする意味はなにか。

基本を述べる。『繡像小説』に「環瀛誌陰」が連載されている。別に「西訳雑記卷一」が該誌第6期のみに掲載された。こちらは単行本にはなっていない。同じ西洋原作の翻訳とはいえ題名が異なる。ふたつの作品があってその訳者

が一致しなければ目録編集者は別に項目を立てるのが常識だ。同じ場所に一緒に記述しない。例をひとつあげれば陳大康『中国近代小説編年史』(2014)^{*7}は別にして([編年②628]など[編年②873]/[編年②641])。それが普通の扱いだ。

趙景深旧蔵書本の実物で確認することができない。いろいろ考える。

「附」についてひとつの推測を述べる。

趙景深旧蔵本は1冊だという。「附」とは附録として同書に収録されている意味だ。そうであれば「環瀛誌陰」の訳者も謝鴻資、徐少范だと考えていい。ただしその実物を見ていないから断定できない。

もうひとつは別の考えだ。

『環瀛誌陰』はあくまでも1冊本で存在する。「附」とは「西訳雑記」を附属させる形で保存されていた。趙景深が『繡像小説』から「西訳雑記卷一」部分を抜き出して『環瀛誌陰』と一緒に梱包していたのではないかと。趙景深自身がそういう扱いをした可能性を考える。ならば目録編集者はそれを「附」と記すだろう。それが私の推測だ。目録作成者が独自に判断して別の場所にある作品について勝手に「附」とはつけないだろう。これも憶測にすぎない。間違っていることもある。

どちらにしても『環瀛誌陰』の訳者中国商務印書館編訳所は個人名をしいて挙げるとすれば謝鴻資、徐少范になる。少なくとも趙景深はそう考えていたものか。なにか根拠があるのかもしれない。謝鴻資であれば確かに商務印書館編訳所の人間だ。

ただし謝鴻資が『環瀛誌陰』の訳者だとすると不都合が生じるのも事実だ。同じ『繡像小説』に掲載した「西訳雑記卷一」は謝鴻資と明記し一方の「環瀛誌陰」には名前を出さないのは不統一だ。

可能性はあるが確認できない。確実な資料はないのだ。趙景深旧蔵本そのものを見ることが

できればはっきりするかもしれない。問題を将来に残して『環瀛誌険』の漢訳者は今のところ不明とする。

結 論

文末に「『環瀛誌険』原作一覧」を掲げておく。それを参照してほしい。

アイゼンマン(奥国維也納愛孫孟 LOUIS H. EISENMANN)は『繡像小説』連載冒頭にある「1 神壇闘狼」の作者であった。また「10 良医殉術」「12 墜崖折脛」も書いている。しかし愛孫孟は『環瀛誌険』全体を代表する人物ではない。たまたま冒頭に置いた作品の著者にすぎないのだ。そこをはっきり認識する必要がある。

原作を明らかにできなかったのは『繡像小説』のその表記に問題があったからだとせざるをえない。

アイゼンマン(愛孫孟)のみの名前を出した。いかにも全作品を書いた著者という場所に配置した。そのほかの11篇に著者名を明示しなかった。これが大きな間違いだ。その処理方法が原作探索を長期間にわたって困難にさせる原因になった。まさか12篇それぞれに作者がいるとは漢訳を読むだけでは気づかない。

漢訳者に隠蔽する意識はなかつただろう。原作者と原作品を明示する必要があるなどとは考えたことがなかった。清朝末期の中国だけが特別だったわけではない。性質は違うにしても『華英初階』『華英進階』などの英語教科書には原作を示すことは基本的にないのだ。当事者は読者に漢訳作品を届けることだけに集中した。そう思う。

当時の翻訳界は欧米の作品を漢語で提供することを優先させた。原作が何で原作者が誰かは重視されなかった。著作権などもとから念頭にはない。そういう事実があったということだ。だから翻訳であることを明記せずあたかも創作に見える翻訳作品も出現している。翻訳を取り

巻く当時の状況そのものが結果として原作を探索する研究者を誤誘導した。

想像の範囲を超えることになった。『ワイド・ワールド・マガジン』という原雑誌を見ることによつてのみ理解ができる。

まとめる。

漢訳者は英文雑誌『ワイド・ワールド・マガジン』から12篇の作品を選択して漢訳した。全体を題して「環瀛誌険」とつける。「ワイド・ワールド」は漢訳すればそのまま「環瀛」となる。「誌険」は探検冒険の記録だ。なるほど原作の掲載された雑誌名にちなんだ題名だった。作者名としては愛孫孟しか提示していない。その原稿を『繡像小説』編集部か商務印書館編訳所に持ち込んだ。訳者が謝鴻賚だとすれば同じ職場の同僚へ手渡した。原稿には冒頭作品の著者であるアイゼンマン(愛孫孟)だけを記載したと思う。あるいは各篇にいちいち原作者を明示していたが『繡像小説』の編集者が削除した可能性もないわけではない。真相は不明なのだ。それらを証明する資料は存在しないだろう。罍

『環瀛誌険』原作一覧

- 1 「神壇闘狼」 LOUIS H. EISENMANN, OF VIENNA. "A FIGHT WITH WOLVES ON THE ALTAR." *THE WIDE WORLD MAGAZINE* vol.3 no.14 1899.6, pp.213-217
- 2 「探穴遇水」 MAJOR H. DE H. HAIG, R.E.. "IN THE FLOODED CAVE." *THE WIDE WORLD MAGAZINE* vol.2 no.9 1898.12, pp.389-394
- 3 「估客逢兇(初出は遠商嬰險)」 P. A. McCANN. "CAPTURED BY CANNIBALS." *THE WIDE WORLD MAGAZINE* vol.3 no.16 1899.8, pp.401-412
- 4 「林遊遇火」 MRS. FRED. MATURIN, NÉE MISS EDITH MONEY. "A NIGHT TO REMEMBER." *THE WIDE WORLD MAGAZINE* vol.3 no.14 1899.6, pp.158-164
- 5 「山行陷穽」 OTTO FRANK. "THE PROFESSOR

IN THE BEAR TRAP.” *THE WIDE WORLD MAGAZINE* vol.3 no.17 1899.9, pp.485-490

6 「遠叟遇盜」 ELLAM FENWICKE-ALLAN “IN THE CLUTCHES OF BRIGANDS.” *THE WIDE WORLD MAGAZINE* vol.2 no.9 1898.12, pp.372-382★Internet Archive なし

7 「獅口余生」 ERNEST BROCKMAN. “OUT OF LION'S JAWS.” *THE WIDE WORLD MAGAZINE* vol.1 no.3 1898.7, pp.227-233

8 「遠遊苦況(初出は克遊記陰一烏立福女史自述)」 MRS. LILIAN AGNES OLIVER. “MY KLONDIKE MISSION.” *THE WIDE WORLD MAGAZINE* vol.3 no.13 1899.5, pp.43-54

9 「泗海失援(初出は入海遇險)」 MAJOR CHARLTON ANNE. “THE PERIL OF SEAMAN DIVER YOUNG.” *THE WIDE WORLD MAGAZINE* vol.3 no.14 1899.6, pp.137-144

10 「良医殉術」 L. H. EISENMANN, OF VIENNA. “A MARTYR TO SCIENCE.” *THE WIDE WORLD MAGAZINE* vol.2 no.11 1899.3, pp.584-590

11 「煙突失墜」 MADAME CATHINCA AMYOT. “IN SEARCH OF MY “GODDESS.” ” *THE WIDE WORLD MAGAZINE* vol.3 no.17 1899.9, pp.517-524

12 「墜崖折脛」 L. H. EISENMANN, OF VIENNA. “THE TERRIBLE ADVENTURE OF EMIL HABL.” *THE WIDE WORLD MAGAZINE* vol.4 no.19 1899.10, pp.30-36

【参考文献】

高橋 修「ジャンルと様式——日清戦争前後」『日本近代文学』第50集 1994.5.15 電字版。13-23頁

張 英『啓迪民智の鑰匙——商務印書館前期中学英語教科書』上海・中国福利会出版社2004.3

樽本照雄『初期商務印書館研究(増補版)』清末小説研究会2016.5.1 電字版

【注】

1) 奥国維也納愛孫孟著、中国商務印書館編訳所訳

『環瀛誌陰』上海・中国商務印書館、光緒三十一年六月首版/光緒三十二年十一月二版。架蔵。また関西大学東アジアデジタルアーカイブ(収録本は初版)で見ることができる。孔夫子旧書網に写真あり。

- 2) 「是編亦採訳西国冒険家言、皆各人自叙所歴之境、摹写逼真、読之幾令人不復知世間有艱險事。外人輒哂我国人無冒険精神、則是書也、不当徒以小説目之矣。共十二段、凡水火盜賊、蛮人凶獸、種種奇險、無不備具、詞筆名雋、装印精良。每部一冊、定價大洋二角」『中外日報』光緒三十一年八月二十二日「上海商務印書館又新出各種小説」[編年⑤2494]翻訳紹介。略号については樽本『清末民初小説目録 第11版』(2019)を参照のこと
- 3) 「□卷 商務印書館/繡像小説本 泰西奧愛孫孟著繡像小説報訳所記皆西人遇險之事情狀離奇訳筆暢達読之可増人急智焉」顧燮光『訳書経眼録』杭州・金佳石好樓 甲戌(1934)夏五月。王韜、顧燮光等編『近代訳書目』北京図書館出版社2003.10 影印本所収。614頁
- 4) 孔夫子旧書網に挿絵を収録した線装1冊本が見える。ただし表紙は手書きで「繡像小説六」とする。これは別刷りを手製の冊子にしたもの。私家版だ。市販されたわけではないだろう。
- 5) 「9 泗海失援(初出は入海遇險)」の作者 MAJOR CHARLTON ANNE の夫人か。
- 6) 渡辺浩司「『趙景深先生贈書目録』を利用した『清末民初小説目録』補」『清末小説から』第35号 1994.10.1
- 7) 陳大康『中国近代小説編年史』全6冊 北京・人民文学出版社2014.1

包天笑「空中戦争未来記」など(中)

荒井由美

中国人の反響

漢訳では3種類がある。ただし現在私が読んでいるのは2種類だ。

刊行順に紹介する。

f (徳) 魯徳耳虎馬爾金著 亜琛重訳「空中戦争未来記」『遠東聞見録』1、3号 光緒33.6.10、7.28(1907.7.19、9.5) (略称 [亜琛])

樽目第11版 (K0309*) には注釈がある。「(藤元直樹) ルードルフ・マーチン著、[高野弦月(巽)訳]『(小説) 破天荒』(小川尚栄堂 1908.4)の元になった VON RUDOLF MARTIN “BERLIN-BAGDAD: DAS DEUTSCHE WELTREICH IM ZEITALTER DER LUFTSCHIFFFAHRT 1910-1931” (1907) か」

疑問符つきだ。原作者「魯徳耳虎馬爾金」はドイツ人のルドルフ (Rudolf 魯徳耳虎) ・マーチン (Martin 馬爾金) を音訳したものだとわかる。間違いない。上の注釈は正しい。

ただしドイツ語から直接漢訳したのであれば訳名を「空中戦争未来記」とするのは不自然だ。「ベルリンーバグダッド」にもとづいた漢訳になるだろう。また雑誌連載が第1号と第3号で完了しているから分量的に少ない。さらに亜琛重訳とする。「重訳」だからドイツ語原作から

直接漢訳してはいない。底本があるはずだと考える。

漢訳題名が破天荒生の日記題名と同じだ。同名の破天荒生日記が底本なのだろうか。しかし破天荒生の翻訳にはマーチンの名前は明記されていない。底本にない人名を漢訳することは無理だろう。疑問が生じる。

決定的な手がかりは発表時間だ。亜琛重訳の雑誌掲載は新暦1907年7月19日である。しかし破天荒生の日本語翻訳が『冒険世界』第1巻第5号に掲載されるのはそれよりも後の新暦1908年5月5日である。発行日の記述が正しいとすれば亜琛の雑誌掲載の方が約10ヵ月も先行している。日本語訳は漢訳の底本にはならない。

考えられる可能性がひとつだけある。底本は英語の『批評の批評』に掲載された英文要約「飛行船の時代——事実と物語」だ。

いくつかの疑問は作品を目にしてからいくらかは理解できた。



李士銳



『遠東聞見録』は日本東京で中国人が刊行していた多数の雑誌のひとつだ。奥付は総理人：李士銳、編輯人：雷昭性/段瑞蘭となっている。第1号には総理 (社長=李士銳) の写真が掲げられている。清国北洋陸軍軍人という*10。軍装で長靴を履き軍刀を前に立てて両手を添え

ている。その両袖には三本筋が見える。編輯發行所が日本東京・陸軍部留学生監督處だからその責任者だ。

該誌の内容は外国の条約、情勢、軍隊、戦争に関係するものが多い。日本語新聞、雑誌、英字新聞、あるいは日本人の著作を漢訳した文章がほとんどだ。その延長線上にルドルフの小説が漢訳されたとわかる。主要内容が飛行船についてのものだから軍事に直結していると判断されたのだろう。

亜琛については不詳。『遠東聞見録』第1号に「日法協約(東京日日新聞)」あるいは「戒白色人種文(英国倫敦泰晤士報)」そのほかを翻訳している。亜琛は日本語と英語ができた。

漢訳の「空中戦争未来記」は第1号と第3号に分載されて章題は以下のとおり。英文要約の該当部分を併記する。

第1号(期)

一、緒言 I-FACTS.

二、德意志之空中艦隊 GERMANY'S FUTURE LIES IN THE AIR.

三、日俄再戦 THE FIRST GREAT AIR-BATTLES.

第3号(期)

四、俄国英傑之出世 SUWAROW, THE NAPOLEON OF THE AIR.

五、支那征服之野心 250 MILES AN HOUR.★

加筆あり/支那軍の規模について説明する

六、德俄外交之断絶 THE AIR-BATTLE-SHIP.

未完

両者は一致する。亜琛漢訳の底本は英文要約そのものである。

英文要約の発表が1907年4月だ。『遠東聞見録』第1号の発行が(正確だとして)1907年7月19日だからほとんど同時といえることができる。漢訳では最初だ。三津木春影「将来の空中大戦争」よりも約2ヵ月の遅れでしかない。

「一、緒言」の冒頭から興味深い説明になっている。

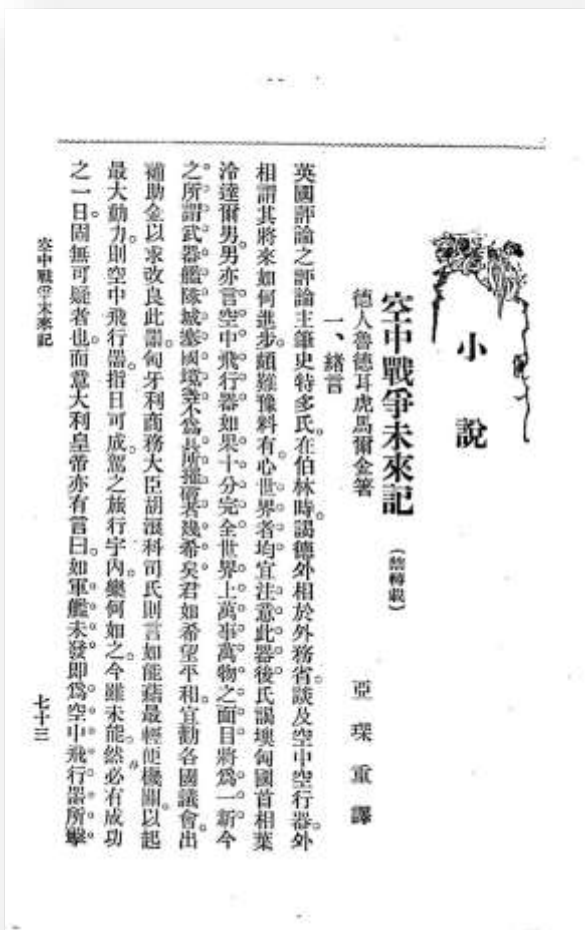
[亜琛] 英国評論之評論主筆史特多氏。在柏林時。謁德外相於外務省。談及空中飛行器。

英国『評論の評論』誌の主筆ステッド氏はベルリンにいた時外務省においてドイツ外相に面会し飛行船について話した。

注釈で示しておいた。英文要約の作者はステッド(William Thomas Stead, 1849-1912)である。雑誌『批評の批評』の創立者のひとりだ。

亜琛の不思議なところはステッド(史特多)の名前を出したことだ。英文要約が『評論の評論』に掲載されているのは事実だ。しかし該文には筆者の名前は明記されていない。それにもかかわらずステッドの名前が漢訳にはある。亜琛の知識が深いことを示している。

さらに言えばこの部分を翻訳している日本語



訳はない。日訳にもとづいた包天笑漢訳にも当然存在しない。亜琛が唯一の例外だという特異さだ。

「一、緒言」は英文要約「I—事実 [I.—FACTS]」を漢訳した。飛行船の有用なことを各国有力者が証言するというのが内容である。各人の証言はほぼ同じで飛行船について賞賛する。内容は省略して発言者の名前、役職名、あるいは出てくる人名を英文—漢訳の順に以下に示す。

D. Aehrental 葉冷達爾、Franz Kossuth 胡浪科司、the King of Italy 意大利皇帝、Santos Dumont 尚脱得育孟、Philippe 喜利勃、Wright Brother 頼脱兄弟、Hiram Maxim 馬基希姆などだ。訳し落しがない。

ロンドンの新聞がロンドンからマンチェスターまで飛行船の競争に大懸賞金をかけると人々は争って参加した。その報道も漢訳している。

以上は英文要約第1部の約半分に相当する。ほぼ直訳となっている。ただ後半で飛行船を宣伝する組織の活動あるいは宣伝雑誌について述べる部分は省略した。そのかわり亜琛が独自に加筆した説明がある。

[亜琛] 以上所述。皆今日欧美人士。對於空中飛行器之実状。自此以後之紀事。則全出想像。蓋出於德國小説家路德耳虎馬爾金之筆。雖有似荒唐無稽之論。然茫茫六合。風雲變幻。頃刻無端。今之所言。安保後日必無其事耶。読路氏所言。愈使吾人希望空中飛行器成功之念。油然而生。罡風颼颼。海天蒼茫。朝發軔於扶桑。夕稅駕於崑崙。列子之奇伝。或有実見之日也歟。

以上に述べたものは皆今日欧米人の飛行船に対する実状だ。それ以後の記事はすべて想像である。ドイツの小説家ルドルフ・マーチンの作品だ。荒唐無稽の論に似ているとはいえ広大な宇宙は変化が複雑で迅速、たちまち際限がなくなる。今でいう安全を確保して後日の無事に備えるだ。ルドルフ氏の言うところを読めば飛行船が成功してほしい思いが勢いよくでてくる。強

風は吹きまくり天空は果てしない。朝に東の扶桑を出発して夕方には西の崑崙に到着する。そういう列子の奇伝があるいは実現する日があるのであろうか。

本文ではドイツ人作者の漢訳を路德耳虎馬爾金と1字違いにしている。「魯」と通音するから気にしなかったようだ。列子の奇伝とは「周穆王」のこと。特別な馬(穆王八駿)を仕立てて中国全土を走り回り崑崙山にも行った。現代の飛行船の奇抜さを中国古代の穆王に結びつけた。

亜琛の書き換え加筆の説明はもとがマーチンの空想科学小説であることをうまく表現している。なによりも日本人が無視した冒頭の説明部分を漢訳しているところがよい。良心的な漢訳であるといえることができる。

英文要約の部分をどのように漢訳したか引用してみる。

[亜琛] 二、德意志之空中艦隊

時則一千九百十年一月元旦。朝陽初昇。天風肅靜。欧州北部。德國京城柏林之皇居中。唐人所謂九天閭闔開宮殿。万国衣冠拜冕旒者。陸海軍將校。劍佩鏘鏘。肅然整列稱德皇壽。德皇即席發揮其睥睨今古。并吞六合之野心。滔滔演說。鼓勵國民。其中有曰。空中飛行器者。世界中至高無上之武器也。其發明之功。殊不讓於火藥。我日耳曼民族。既有統一全球之志。則他日急宜將此器設一特別科隊。以編成空中兵旅團。朕既下令大宰相。要求五十五萬磅。為建造德意志空中艦隊之費用。夫我國苟欲輸送步兵三十萬。即須用飛行器三萬具。朕已在克虜伯會社。訂購遮沛林式運送用飛行器四百隻。及砲兵所用飛行器。此器若成。則我德國能於二十時間乃至二十三時間以內輸送軍隊四十萬以臨彼英吉利夫。我德意志之將來。蓋不在陸上不在海上而在空中者也。嗚呼噫嘻此即我陛下編制空中砲隊之宣言。而適合於我德人之希望。今後二十年間之歷史。其將如何發達乎。我躬俟之矣。

二、ドイツの空中艦隊

時は1910年1月元旦、初日が昇り天風は静かだ。ヨーロッパ北部ドイツの首都ベルリンの皇居、唐人のいう正門の開かれた宮殿では世界各国の衣装を着て冠に串玉を帯びた人々、陸海軍将校が佩刀をガチャつかせ肅然と整列してドイツ皇帝の長寿をお祝いした。ドイツ皇帝は席につくと今古を睥睨しすべてを呑み込む野心を發揮し滔滔と演説をして国民を励ました。その中でつぎのように言った。「飛行船は世界で最高無上の武器である。その発明の成果は決して火薬に劣るものではない。わがゲルマン民族は全世界統一の志をすでに有している。ならば後日早急にこの機械でもって特別機械部隊を設けるのがよい。空中兵旅団を編成するのだ。朕はすでに首相に55万ポンドを要求するように命じた。ドイツ空中艦隊建造の費用である。わが国がもし歩兵30万を輸送したいのであれば飛行船3万艘を使わなければならない。朕はすでにクルップ社にツェッペリン式運送用飛行船400艘および砲兵の使用する飛行船を発注した。それができればわがドイツは20時間ないし23時間以内に軍隊40万をイギリスまで運送することができる。わがドイツの将来は陸上になく海上になく空中にある」。ああこれこそが空中砲兵隊を編成するというわが陛下の宣言であった。それはわがドイツ人の希望に適合している。今後20年間の歴史がいかに発達するものか私は自らそれを待つ。

英文要約の「ドイツの未来は空中にある」を漢訳では「ドイツの空中艦隊」に変更した。漢訳は底本とした英文要約と数字の異同が数箇所ある。また「唐人」を出すなど中国色を少しにじませた。しかし基本は英文に忠実な漢訳だといえる。日本語訳を底本とした包天笑漢訳とは異なる。

「三、日俄再戦」に進む。第2次日露戦争が勃発する場面だ。参考までに英文要約の拙訳を再度引用する。

[英文日訳] 日本は1905年以來求めていたロシアと開戦する口実を見だし、1912年10月、第2次日露戦争が宣言された。1913年3月、戈壁砂漠における残忍な戦争によりロシア全軍は降伏した。日本の空中戦艦、空中輸送列車、戦闘モーターはロシア軍を完全に上回っていたのである。

[丑琛] 至此時遂藉一口。実与俄開釁於是一千九百十二年十月。第二之日俄戦争再起。翌年三月。両軍激戦於蒙古戈壁。数日之後。俄軍再敗。遂降於日。蓋此役未發以前。日之海陸軍社会。俱傾心研究殺人之種種武器。横須賀吳佐世保舞鶴四軍港之工作。夜以繼日。故兩軍相對時。日之戦闘飛行器。空中飛行列車。戦争起動機等。皆優於俄。復更有遮沛林式起動器。是以俄軍遂致一蹶塗地而不能起。

このときに至りついに口実をもうけて1912年10月ロシアに戦いを挑んだのであった。第2次日露戦争が再び始まる翌年3月に両軍はモンゴルの戈壁砂漠で激戦となり数日後にロシア軍は再び破れ日本に降伏した。この戦役が始まる以前に日本の海陸軍界では種々の殺人兵器を鋭意研究しており横須賀、吳、佐世保、舞鶴の四軍港において日に夜をついで作業が行なわれた。ゆえに両軍が相対したときには日本の戦闘飛行船、空中飛行列車、戦争モーターなどはすべてロシアよりも優れていた。またさらにツェッペリン式モーターがありロシア軍を一敗地にまみれさせ起き上がることができなくさせたのだ。

英文要約にあるままの第2次日露戦争を漢訳している。ただし加筆がある。漢訳の下線部分が漢訳者による追加である。日本の4軍港を具体的にあげる箇所は英文要約にあるはずもない。「ツェッペリン式モーター」というのも丑琛の補足である。日本の軍港を列挙するなど単なる漢訳者ではなさそうだ。日本在住の中国人軍事関係者を推測させる要素でもある。

ロシア軍の敗北によりロシア皇帝および皇族、近臣らはすべて日夜驚愕した。ロシア皇帝が帝

王の家に生まれたことを嘆く台詞は亜琛の創作だ。その加筆の中に「ああ、専制朝廷の末路はひとり支那の暗澹とし血なまぐさいのに始まるものであろうか。東西今古に証を求めればもとより符合するものはあるのである〔嗚乎。専制朝廷之末路。豈独支那始為之慘澹血腥也哉。証之東西。索之今古。夫固有若合符節者矣〕」という。ここに支那を出すのも亜琛の工夫だ。どうしても自国のことが気になる。飛行船を主題としたドイツ作品の英文要約であることをややもすれば忘れそうになるらしい。

ロシアは敗戦後国内が10の独立国と20の政府に分裂してしまい国民の大半は飢餓に苦しんだ。これが英文要約だ。亜琛はその中間に彼独自の加筆を実行している。

〔亜琛〕嗟嗟。昔之俄羅斯。日厚擁精兵。横行欧亚。每欲效法羅馬。馭哥薩克蛮族以為軍。標斯拉夫同化以為治。據君士但丁以為京。括亞欧非美澳以為境。曾幾何時。鉄沙權力。瓦解冰銷。赫赫天驕。四分五裂。

ああ、昔のロシアは日に精兵を厚く擁しヨーロッパ、アジアに横行していた。ローマにならおうとコザック蛮族を軍として走らせ斯拉ヴ同化を標榜して統治した。コンスタンティノーブルを首都としアジア、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、オーストラリアを境に統括していたのだ。いつとはなしに堅固なツァーリズムは瓦解し消えてなくなり輝かしい神の寵児は四分五裂したのだ。

英文要約には存在しない説明文だ。この加筆によってロシアの状況がより鮮明になったと感じる読者もいるだろう。

その時ロシアに新ナポレオンというべき不世出の英傑マイケル・シュワロー (Michael Suwarow、米哈爾史哇羅〔亜琛はミハエルと読んだ]) が出現した。亜琛はシュワローを描写してここでも中国風に表現したかったようだ。英文要約にはない部分は次のごとし。「蛟龍は

雨を得て天なかばの風雲をなし(能力ある者が力を發揮する機会を得て大暴れをし)、虎豹は山にもどり風の中で呼嘯をほしいままにする(英雄が故郷にもどり思い切り大声をあげる)〔蛟龍得雨。作天半之風雲。虎豹登山。恣風中之呼嘯〕

みずちに雨と風雲、虎豹に山と叫びは常套句だ。伝えられてきた語句を組み合わせて使い英雄の描写をする決まり文句のようなもの。見慣れた表現を目にした読者は英傑シュワローの存在をより明確に意識するだろう。

シュワローは空中艦隊を建造しただちに中央アジアとコーカサスを攻撃征服した。その彼は飛行船上で生活している。「アルミニウム製の飛行船 his aluminium motor-air-ship」である。亜琛は「亜爾米里武姆」を当て文末に説明を加えた(句点は筆者)。

〔亜琛〕訳者按。篇中所用亜爾米里武姆(Alumi^マr[n]ium)乃金属元素之一。質量最輕。置諸空气中光沢不失。欧美日本軍隊中飲食所用器具皆以此為之。

訳者注。篇中に用いたアルミニウムは金属元素のひとつだ。質量は最も軽く空气中で光沢を失わない。欧米日本の軍隊で飲食のときに使う器具はみなこれである。

アルミニウムについてのなにげない説明のように見える。しかし欧米日本の軍隊で使用しているという注釈は具体的だ。軍務に素人ではできないだろう。これも亜琛が軍関係者ではないかと推測する理由のひとつだ。

亜琛の行なった比較的大きな加筆を紹介する。英文要約では「250 MILES AN HOUR. 1時間250マイル」だ。飛行船の性能が飛躍的に向上したことをいうのがその内容である。弦月の『破天荒』では「六、一時間二百五十哩——清国の危機」と副題をつけた。清国 China がシュワローの攻撃目標になることを意味する。亜

琛はそこをさらに一步すすめて「五、支那征服之野心」とあからさまにした。英文とは無関係に章題を変更し一部の内容を自分の考える方向で増補したのだった。

英文要約では簡単な記述だ。シュワローが飛行船競争を計画しその終点を中国に設定した。それで中国征服を思いつくという。「それらの競争はおおむね中国の方向にむけられていたからそのことがシュワローに帝国征服を提案したようなものだった。 **These races, being generally in the direction of China, suggested to Suwarow the conquest of that Empire.**」それだけのこと。

亜琛は少しの加筆を行ないながらほぼ英文どおりに漢訳しているのは上の箇所までだ。

次に約10行320字もの加筆を行なう。China という単語を見た亜琛は愛国心を発動してしまう。中国征服の話が出てきたから中国人として詳しく述べたくなつたらしい。

亜琛は「それ支那の面積は400余万英方マイルあり〔夫支那面積有四百余万英方哩〕」とはじめる。人口は総世界の4分の1だ。不世出の英雄が支那を支配すれば世界は白人のものに帰し「支那に土地はあっても彼らの土地ではなくすべて赤黒いひげと青い目のもの(よりも紅毛碧眼としたほうがわかりやすい)が縦横無尽に踏みつける場所となる。人がいても人ではなくことごとくが鳥のように息をしてそこに居るだけ。いつも踊り心ゆくまで歌っていた輩は昔は文明を持っていたがすでに皆無となった。すべての新科学、新物質の利器は遠く他人に及ばないのだ〔支那有地而非其地。皆紫髯碧眼。縦横蹂躪之場。有人非其人。尽鳥息禽居。恒舞酣歌之輩。昔時固有文明。既掃地以尽。而一切新科学新物質之利器。又遠不如人〕」

亜琛が続けて詳しく述べるのは軍艦のトン数だ。1万トン、あるいは1万56千トンあるところが支那には67千トンでしかない。それも自分で造ることはできずに日本から購入するほ

かなく操縦もできない。飛行船にいたっては夢のまた夢。支那人はなお乳飲み子の状態なのだ〔支那人尚在襁褓〕。

軍事技術に遅れた支那は亜琛から見ても征服されるほかない。軍艦のトン数までも具体的に示している。清国軍隊の現実を知る者だけが書くことのできる説明だ。まさに漢訳者の悲痛な叫び声が聞こえてきそうな加筆となっている。

1915年シュワローは空中戦闘艦3艘を北京の上空5千フィートに進めた。侵略攻撃され征服されるのが目前に迫っている。亜琛はどうしても最後に一言追加したかった。シュワローに成り代わっての発言だ。

シュワローはみずからアルミニウムの囲いに寄りかかって一撃のもとに粉碎することを考えていた。「私が支那人であればだが、私は死守するぞ。他国人がわが尺寸の土地でも占拠することを願わない。それでこそ震旦(インドにおける呼称)の好男子、神話民族の子孫ではないか〔吾如為支那人乎。吾其以死守之。而不願他国人之據我尺寸土壤者。是乃震旦神州之好男子。而巴枯民族之孝嗣也歟〕」

漢訳者が身を乗り出しすぎて読者の気分が後退する箇所だ。底本にした英文要約とは関係のない説明であることは明らかだ。しかしそれを気にせず漢訳者は愛国心を燃やした。

どういう凄惨な攻撃が始まるかと思えば次章で肩透かしになる。

英文要約の THE AIR-BATTLE-SHIP. (空中戦艦)は漢訳では「六、徳俄外交之断絶」とした。ドイツとロシアの外交断絶となった。1916年突然にドイツ・ロシア戦争がはじまった。それによりシュワローの支那征服の野望は頓挫してしまった。

ドイツは皇帝の演説があつて以来空中艦隊の増強と経営に力をつくしてきた。1916年4月19日、ドイツとロシアの国交は断絶した。

以上『遠東聞見録』の刊行は第3号までしか確認できない。亜琛の漢訳は英文要約の全21章

の最初5章部分までである。英文要約にほぼ忠実な漢訳という印象が残る。一部中国風味を盛り込んでいて独特な面白さがある。それが2回の連載で中断してしまったらしい。残念なことである。

英文要約「飛行船の時代」がどうして「空中戦争未来記」になるのか。疑問は残る。それは今のところ不明である。 罍

【注】

10) もとは清国から派遣された留学生だったようだ。李慶国「吳禄貞と日本(1)——吳禄貞に関する伝記史料をめぐって」『追手門学院大学国際教養学部紀要』2016年第10号 2017.1.30 電字版。また胡穎は次のように書いている。「清朝政府の陸軍部から派遣された総監督李士銳により統一管理されるようになった」76頁。「清末の中国人日本留学生に関する研究——主に留学経費の視点から」神奈川大学大学院『言語と文化論集』特別号 2017.3 電字版

『清末小説から』第135号

2019. 10. 1

いくたびかの阿英目録25 ……樽本照雄
包天笑「空中戦争未来記」など(上) ……荒井由美
漢訳小説「ヴェニス商人」(上)——「一磅肉」
と「一斤肉」 ……沢本郁馬
『老残遊記』初版の刊年——孟晋書社に關係して
……神田一三
《广肇周报》(1919~1920) 小説目録……王 玉
林紓小説口訳者李世中生平考 ……王 玉

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

漢訳小説「ヴェニス商人」(下)

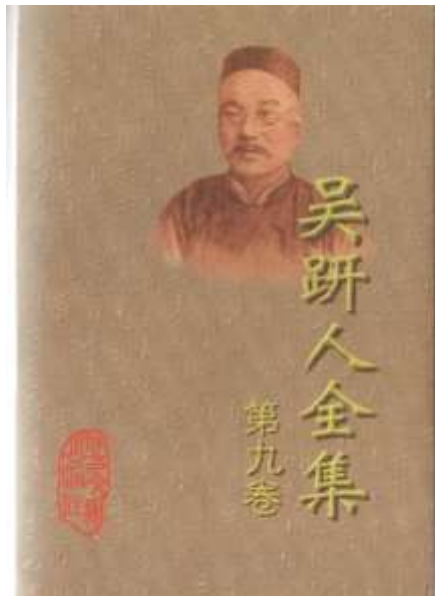
——「一磅肉」と「一斤肉」

沢本郁馬

2 「一斤肉」のばあい

もうひとつの「一斤肉」は刊行年がほかのどの作品よりも早い。『新庵諧訳初編』に収録されている。

上海周樹奎桂笙(周桂笙)戯訳 南海吳沃堯(吳趼人)編次「一斤肉」『新庵諧訳初編』下巻 上海・清華書局 光緒29(1903) 孟夏



今、海風主編『吳趼人全集』第9卷(哈爾濱・北方文藝出版社1998.2)所収のものを使用する。

この『新庵諧訳初編』は『海外奇譚』と同年代。しかし刊年を月単位でみると四月で先行する。さらに初出が『寓言報』であるらしい。紫英「説小説」(『月月小説』第5号 光緒丁未(1907)正月)に「新庵諧訳」を紹介する部分があり該書第2巻所収の諸篇は「ほとんどが寓言報のために訳されたものだ[大抵為寓言報而訳者]」と書いてある^{*8}。また1902年だという指摘もある^{*9}。ただし『寓言報』掲載であるらしいというだけ。該紙に掲載されたかどうかは現在まで確認されていない。

不確かな要素はある。漢訳小説「ヴェニス商人」は周桂笙のものが中国最初ということになるのか。検討が必要だ。

まずその内容を見てみよう。

分量は極端に少ない。わずかに3頁を超えるくらいだ。もし新聞『寓言報』に掲載されたのであれば納得する短さだ。ラム本にはほぼ忠実な「一磅肉」を見たあとだから周桂笙が行なった簡略化の度合いが大きいと感じざるをえない。あとで説明する。

最初に書いておく。「磅(ポンド)」は約450gだ。中国の「斤」は現代(1929年以降)では500gだが以前は約600gだった。イギリスの450gと中国の600gでは差がある。周桂笙は実際の重さにはこだわらず中国人の感覚で「斤」を採用したようだ。

もうひとつシャイロック Shylock を顕道と漢訳しているのには引かかる。訳者不記本は宰路だし林訳では歇洛克だ。申報訳は希洛克でそれなりに英語音と関連している。周桂笙がなぜシャイロックに顕道を当てたのかは不明だ。それ以外のアントーニオ(阿通尼耶)、パッサーニオ(裴式尼耶)、ポーシャ(坡下)の漢訳は普通に通音しているから顕道だけが余計に気になる。

○漢訳の本文

さて張純が句読点を施したままに冒頭を示す

(原文に記号は使用されていない)。

猶太人顕道者、十六世紀時意大利之寓公也。家擁厚資、富幾敵国、而猶專以盤剥重利、刻剥小民為事。故人多訾議之、而卒無如之何也。泊其晚年、乃有阿通尼耶者、藉先人余蔭、亦以豪富鳴於時。資産之雄、殆堪与顕道相伯仲、而宅心之仁厚、接物之謙和、則較諸顕道之居心險詐、為富不仁者、相去若霄壤焉。

ユダヤ人シャイロックは16世紀イタリアの大金持ちである。莫大な財産を有しその富は国家にほとんど匹敵した。もっぱら高利で貸し出し絞り取り庶民を薄情に搾取した。ゆえに人は多く彼を非難し結局は見放したのだった。晩年になるとアントーニオというものが出てきた。父の財産を受け継ぎ富と力でその時代に知られた。資産は十分にありほとんどシャイロックと伯仲していた。おまけに心根は情け深く手厚く人に接して温和だったからシャイロックの心根が邪悪で金もうけのためには残酷なのと比べて雲泥の差があった。

周桂笙は「16世紀」と明記する。確かにシェイクスピアの時代だからそう書いても間違いではない。だがラム本には年代の表記はないのだ。ここにはヴェニスも出てこなければシャイロックが相手にしていたのはキリスト教徒であることも書かれてはいない。ラム本にもとづいたように見えるがびたりと重ならない。

周桂笙は翻訳で有名な作家だ。コナン・ドイルのシャーロック・ホームズものの漢訳(1904)がある。ほかにヴェルヌ『地心旅行』(1906)、アラビアン・ナイト、グリム童話など多彩な翻訳を公表している。菊池幽芳『電術奇談』(1903)では呉趺人が漢訳にもとづいて改編し周桂笙は評点で参画した。ふたりは親友と一緒に仕事をした例だ。

呉趺人が『月月小説』を主宰したとき自らを「総撰述」とし周桂笙は「総訳述」と称した。『月月小説』に掲載されたふたりの写真を掲げる。見慣れたものだ。



周桂笙

呉趺人

周桂笙の『新庵諧訳初編』が『呉趺人全集』に収録されている主たる理由は「呉趺人編次」と表示されるからである。

周桂笙は英語とフランス語ができたといわれる。ラム本を前にすれば英語ができる人の漢訳にしてはどこか隙間がある。上に引用した箇所を見れば完全に一致しているわけではない。

アントーニオには親友バッサーニオがいた。昔は金持ちだったが今は零落している。その彼がポーシャを娶ろうとしたが金がないためアントーニオに経済的援助を頼み込んだ。アントーニオはすぐには応じることができずバッサーニオには明日もういちど来てくれと帰らせた。しかたなくシャイロックから金を借りることにした。この筋の運びもラム本ではない。

不思議なことはまだある。アントーニオはひとりて馬を走らせる。バッサーニオとふたりして行くわけではないのだ。

シャイロックは彼を出迎えた。アントーニオとシャイロックの会話がはじまる。

寒暄既畢、即詢来意云何、阿氏曰：“無故而履審蔵、意將何若、君当自知之。”曰：“然則貸金耳？ 敢請其數。”曰：“五万。”曰：“先生之教、敢不唯命。”

あいさつが終わり来意は何かとたずねればアントーニオが言った。「理由なく穴倉に足を運ぶものか。こちらの考えが何かお前は当然知っているだろう」「ならば金を借りたいので？ いくらです」「5万だ」「あなた様のご命令では従わないわけにはまいません」

ラム本ではシャイロックとの会話が細かく記述されている。シャイロックが嫌味を全開するのだ。人殺しの犬と罵り唾を吐きかけ足蹴にし面罵の限りをつくした人間(アントーニオ)がどの口で金を貸してほしいというのか、犬が金を持っているのか、などという場面がある。しかし周桂笙訳にはそれが存在しない。金を貸すことをあっさり承諾する。奇妙なのは金額だ。「5万」(通貨単位なし)はラム本の「3千ダカット」とは大いに異なる。

小さいところだが「寒暄既畢(あいさつが終わり)」は中国での決まり文句だ。シェイクスピアには合わない。

つぎは「肉の契約書」である。

阿氏悦、命楮墨将署契券、曰：“敢請子金所需？” 顯道曰：“区区五万之母、尚望子金耶！ 請毋須此、第署一約足矣。” 問何約。曰：“償金之日、約在一月。有逾約者、請於君身割一斤肉以酬我也。” 阿氏聞之、初頗駭異、及察其形色、若真若戲、殊莫測其命意所在。

アントーニオはよろこび紙と墨を命じて契約書に署名するからと「利子はいくらだ？」と聞く。シャイロックが答えて「わずかに5万の元金ですぞ、利子なんかどうしてほしいものですか！ そんなことはなしで。」

ひとつの条件にただ署名してもらえただけでよろしいんです」それはどういう条件かと問えば「返済の日は約1ヵ月後。約束の日を過ぎたばあいはあなた様の肉1斤を報酬にいただきたいんで」アントーニオはそれを聞いてはじめはとても驚きいぶかしく思った。シャイロックの様子を見れば本当のような戯れのようにもあってその本意がどこにあるのかまったくわからなかった。

ラム本ではシャイロックの口から「冗談で(in a merry sport)」と表現していた。もとの莎劇をそのまま反映している箇所だ。周桂笙は地の文でアントーニオの思いとして「本当のような戯れのようにもあって」と表現する。似ているが一致しない。

また期日を「1ヵ月」に限っている。ラム本では「一定の期日に by a certain day」だった。莎劇では「3ヵ月で3千ダカット」だ。周桂笙訳はそれらのいずれでもない。

さらに異なる箇所がある。シャイロックから借りた金をアントーニオがバツサーニオに手渡す場面がある。

阿氏乃出銀券与之日：“此非僕物，適亦借助於他人者。”因告之故，且及颯道要挾之苛，立借券之奇，相与狂笑，互嘆其用心之毒，而憐其設想之愚，咨嗟久之。

アントーニオは銀兌換券を出して言った。

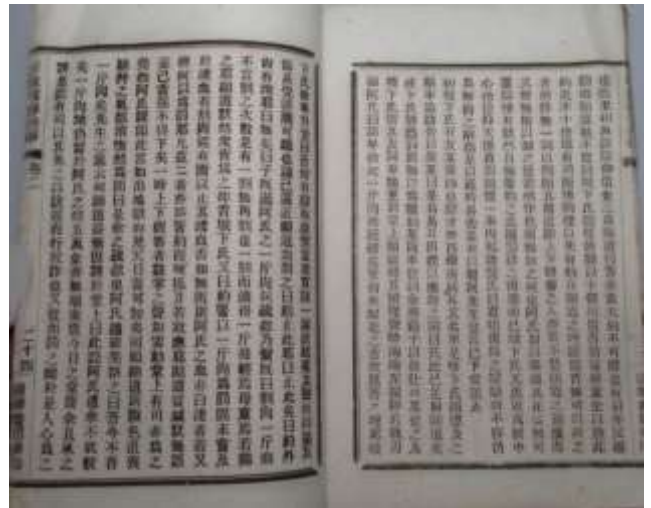
「これは私のものではない。ちょうど他人から借りたものだ」その経緯を説明してシャイロックがどうしようもなく苛酷で借用証書をつくる奇妙さに言い及ぶとふたりとも大笑いした。互いに彼の下心の悪辣さを嘆きその着想のおろかなことを憐れんでしばらく嘆息したのであった。

ラム本でも3千ダカット(金貨)だ。金貨そのものでなければ時代的にも合致しない。それ

を周桂笙は「銀券(銀兌換券)」にした。「銀券」は見慣れないかもしれないが中国の小説には出てくる。だいたい銀本位制は中国のものであってヴェニスには通用しないだろう。しかもバツサーニオはその金で身なりを整えるなりしてポーシャに会いに行くのだ。現金でなくては役に立たない。どう見てもこの「銀券」は奇妙だ。

アントーニオがシャイロックと結んだ契約内容についてここでは説明しない。地の文で書いてあるから省略したと思われる。そこで「ふたりとも大笑いした」では事の重大さが伝わってこない。ここはバツサーニオが形だけでも危惧の念を表明する箇所だろう。ラム本とは不一致だからどこかおかしい。

大きく異なるのはポーシャが弁護士に変装する場面がないことだ。バツサーニオとふたり一緒に法廷に現れる。ポーシャはその裁判中に友人の弁護士に助言を求めに行くため退座するというかわった設定に変更した。



孔夫子旧书网から

法廷にもどってきたポーシャは契約書を読み上げて内容をシャイロックに確認させる。肉の切り取りを許す。そこまではいい。ポーシャはラム本とは少し違うことを話す。

「割肉一斤而不言割之次数，是有一割無再割也。一割而適得一斤，毋輕焉，毋重焉，若能之耶？」

「肉1斤を切り取るとあるが切り取る回数を書いてない。切り取るのは1回だけで2回目はない。切り取り1回でちょうど1斤でなくてはならない。軽くても重くてもだめだ。できるか？」

ラム本では切り取る回数まで書き込んではいない。回数がなければ2回目があってもいいように思う。だが周桂笙はポーシャに1回だけだと断言させた。

あとアントーニオの血は流すなというのは同じ。

周桂笙の「一斤肉」に登場するのはシャイロック、アントーニオ、バッサーニオ、ポーシャの4人を中心にする。取り巻き連中、あるいは使用人はすべて削除してある。指輪も出てこない。喜劇的要素をまったく抜いて血の裁判に絞った物語になっている。大胆に要約したというべきだ。

○結 論

先行文献に「一斤肉」について言及するものがある。鄭志明「《新庵諧訳初編》翻訳史価値再発見」（2011）^{*10}だ。説明して「『新庵諧訳初編』下巻に収録された「一斤肉」はその実イギリスのラム姉弟が改編したシェイクスピア物語の「ヴェニス商人」であり最も早い漢訳だ（《新庵諧訳初編》下巻収録的《一斤肉》其実は英国蘭姆姐弟改編的莎劇故事《威尼斯商人》（The Merchant of Venice）的最早中訳）」とある^{*11}。

「最も早い漢訳」という指摘だ。しかしこれには説明が必要になる。

「最も早い漢訳」といってしまうと誤解が生じる。原文に忠実な翻訳だという印象を与えてしまう。それは違う。上に見てきたとおりラム

の「ヴェニス商人」をそのまま漢訳したものではない。要約なのだ。しかもいびつな形にしまった。

周桂笙訳は要約だからラム本との関係が問題になる。

少なくともラム本そのものではない。しかしラム本からは遠ざかっているとはいえ無関係であるともいいにくい。登場人物を4人に限定して粗筋は基本的に共通している。ただし一部に変更を加えているのは紹介したとおりだ。「斤」「寒喧既畢」「銀券」という中国になじみの語句を使用して中国人読者には理解しやすい工夫を加えた。

以上を見ればラム本以外で児童向けに書かれた英文を参考にしている可能性は低い。あるいは商務印書館が刊行した英語読本に収録した文章に該当するものがあるとも思えない。

周桂笙が提出したこの「一斤肉」はラム本そのものではない。ラム本を基本におきながら周桂笙が独特の操作改変を加えた。登場人物を絞り部分的に省略と加筆を実施して大胆に要約した彼独自のものだ。

以上を次のようにまとめる。「一斤肉」は周桂笙流にラム本の粗筋を要約し改変を加えた漢訳小説「ヴェニス商人」である。

ラム本「ヴェニス商人」の漢訳についていえば『瀛外奇譚』所収のものが中国では最初になる。 □

【注】

- 8) 胡從経「周桂笙の児童文学翻訳作品」（『晚清児童文学鈞沈』上海・少年兒童出版社1982.4。150頁）で「童話」として「一斤肉」を出す。説明はない。
- 9) 連燕堂「開闢翻譯新途徑的周桂笙」（『中国近代文学百題』中国国際廣播出版社1989.4。384頁）で「一斤肉」には触れず1902年とする。
- 10) 鄭志明「《新庵諧訳初編》翻訳史価値再発見」

『河北北方学院学报(社会科学版)』第27卷第5期
2011.10。30頁

11) 典拠は次のとおり。鄭錦懷、岳峰「莎劇故事的最早中訳再考」に「三、《一斤肉》是莎劇故事的最早中訳」とある。劉文彬、李亜舒『英漢比訳研究二十年』青島・中国海洋大学出版社2011.4所収。163頁。

【参考】内丸公平「シェイクスピアと英語教育：中等学校用英語教科書(1886年-2016年)における

シェイクスピア受容の考察」『日本英語教育史研究』第33号 2018.5.10

喋血生：昙花一现的清末小说翻译家

梁 艳 王 玉

[摘要]喋血生是一位活跃在清末的小说翻译家。在1903-1907年这短短的5年间，他翻译了6部小说：《少年军》系列、《专制虎》、《摄魂花》、《返魂香》、《雌雄蜥》和《消露》。这些译作的底本都来自日文。关于喋血生的真实身份，目前能肯定的是，他曾是晚清四大文艺期刊之一的《月月小说》社员。此外，喋血生很可能是陈景韩的早年笔名，但仅凭目前的史料尚不能完全断定。

[关键词]喋血生；《浙江潮》；翻译小说；日文转译；陈景韩

1903年，浙江籍留日学生在日本东京创办《浙江潮》月刊，“喋血生”是其小说栏目的重要作者。关于他的真实身份，学术界目前仍没有定论。有学者在论著中未经考证直接将喋血生视

为陈景韩，也有学者认为他们是不同的两个人。笔者多方搜集资料发现，喋血生在1907年加入了晚清四大文艺期刊之一的《月月小说》社，他是陈景韩的可能性较大，但仅靠目前的史料尚不能完全断定。无论喋血生是谁，他在晚清翻译小说史上都占有一席之地。

一、喋血生翻译小说在晚清的影响力

喋血生第一次亮相，是在1903年2月17日。他在《浙江潮》第1期刊发了军事小说《少年军》、侦探小说《专制虎》。其实，这两篇小说当时并未署名，而是根据第3期连载《专制虎》、第7期连载《少年军》的“喋血生”署名进行倒推的。



■喋血生译《少年军》

喋血生最后一次露面是在1907年10月7日。当时,《月月小说》再次刊发了短篇军事小说《少年军》。小说正文页署名社员(目录页署“社员旧著”-笔者注),全文转载自《浙江潮》第7期刊《少年军(二)》,字句上稍有改动,由此可知此“社员”即喋血生。

据笔者统计,在1903-1907年这5年间,喋血生翻译了6部小说。这些翻译小说分别为《少年军》系列、《专制虎》、《摄魂花》、《返魂香》、《雌雄蜥》和《消露》。前5部刊发于《浙江潮》月刊,《消露》则见于近代第一大报《申报》。

月10日被《民治日报》转载²⁾(此处为转引,笔者未见原报)。《民治日报》1918年11月25日创刊于四川成都,社长游运焯,编辑郭亮东,发行文瑞生。自称以“拥护民权,促成法治”为宗旨,设有社论、时评等18个栏目。1920年8月1日改名为《四川日报》³⁾。

二是时人对喋血生译作的评论。1905年,松岑在《论写情小说于新社会之关系》中称,“吾读《少年军》而崇拜焉,吾安得国民人人如南美、意大利、法兰西童子之热心爱国,牺牲生命,百战以退虎狼之强敌也”⁴⁾。这篇评论文章刊于晚清四大文艺期刊之一《新小说》月刊。陶曾佑在《中国文学之概观》中表示,“……许冷血、天笑生、李伯元、喋血生之小说,均为一般文士所崇拜”⁵⁾。此处“许冷血”或是陈冷血之误,这也说明,当时已有人将陈冷血、喋血生视为两位不同的作家。这篇文章刊于《著作林》月刊,该刊1906年在浙江杭州创刊,后迁至上海,1908年停刊。换言之,陶曾佑一文写于1906-1908年之间。松岑、陶曾佑两人与喋血生活跃时间相近,他们的观点比较有代表性,也说明了喋血生译作在清末的影响力。



■喋血生译军事小说《消露》

喋血生的译作在清末颇具影响力,这从以下两点可以看出:

一是喋血生的译作被多次转载。喋血生翻译的小说《少年军》,除了在《浙江潮》月刊发表外,1904年7月11日被《萃新报》半月刊第2期转载(刊登于“军事界”栏目中,转载自《浙江潮》第7期《少年军(二)》-笔者注)。该报1904年6月在浙江金华创刊,提倡学习西方、兴办实业和教育,倾向资产阶级革命,出版至第6期被清廷查封。《萃新报》为何要转载小说《少年军》?这个从该报发刊词可以见出一二,“采辑海内外新报之学说丛谈,为我桑梓同胞作警晓钟、作渡津筏”¹⁾;再考虑到两份刊物同为浙江籍人士所办,转载实在是自然不过。到了1907年10月7日,《少年军》又被晚清四大文艺期刊之一的《月月小说》刊发,这在上文已有叙述。

此外,喋血生译《雌雄蜥》也于1919年10

特别值得一提的是,徐兆玮曾于1905年为喋血生的翻译小说作诗多首,其中《少年军(一)》二首,《少年军(二)》三首,《专制虎》三首,《摄魂花》四首,《返魂香》二首,《雌雄蜥》五首。现将其日记中的相关记载及诗作原文摘录如下:

表1 徐兆玮日记摘录⁶⁾

时间: 光绪三十三年 (1905)	内容
正月十三日丙戌 (2月16日)	阅报,《浙江潮》。第一期。
正月十四日丁亥 (2月17日)	阅报,《浙江潮》。第二期。
正月十七日庚寅 (2月20日)	作诗,《少年军·一》两绝句。时欲为译本小说提要,每书一种赋数绝句,而掇其大略于后。阅报,《浙江潮》。第三期。

正月十八日辛卯(2月21日)	作诗,《专制虎》三绝句。 阅报,《浙江潮》。第四期。
正月二十日癸巳(2月23日)	作诗,《摄魂花》二绝句。
正月二十一日甲午(2月24日)	作诗,《摄魂花》二绝句。 《摄魂花》,绣像小说译本,名《俄国包探案》;新小说译本,名《毒药案》,略有异同,实只一事也。
正月二十三日丙申(2月26日)	作诗,《少年军·二》三绝句。
正月二十四日丁酉(2月27日)	作诗,《雌雄蜥》二绝句。
正月二十五日戊戌(2月28日)	作诗,《雌雄蜥》三绝句。
正月三十日癸卯(3月5日)	正月凡作诗:《元日立春》一首、《虞城对雪》一首、《读郑所南<心史>感赋》二首、《宣南对雪》一首、 <u>《少年军·一》二首、《专制虎》三首、《义勇军》二首、《摄魂花》四首、《哀尘》一首、《少年军·二》三首、《雌雄蜥》五首、《梦游二十一世纪》七首、《小仙源》二首、《新译华生包探案》六首。</u> 阅报:《时务报》一册,一、二、三号。《江苏》十册,共十二号。《国闻汇编》一册,一、二、三、四、五号。 <u>《浙江潮》四册,一、二、三、四号。</u> 《新新小说》二册,一、二号。《女子世界》十册,一至十号。
二月十四日丁巳(3月19日)	阅报,《浙江潮》一册。第五期。
二月望日戊午(3月20日)	阅报,《浙江潮》一册。第六期。
二月十七日庚申(3月22日)	阅报,《浙江潮》一册。第七期。
二月十八日辛酉(3月23日)	作诗,《返魂香》二绝句。 阅报,《浙江潮》一册。第八期。

二月十九日壬戌(3月24日)	阅报,《浙江潮》一册。第九期。
二月二十一日甲子(3月26日)	阅报,《浙江潮》一册。第十期。
二月三十日癸酉(4月4日)	二月凡作诗:《次希孟韵》二首、《和陆枝珊移居》四首、《花朝雨,先一日雪》一首、《斯巴达之魂》二首、《忏悔录》二首、《返魂香》二首、《秘密使者》十二首又四首、《春阴》三首。 阅报:《游学译编》十二册,全。《新新小说》二册,三、四号。 <u>《浙江潮》六册,五至十号。</u> 《绣像小说》二册,一、二期。

少年军一

登车誓死励同群,热血淋漓染阵云。长为国民留纪念,美洲南部少年军。

义勇无端说拒俄,支那影响果如何。新声谱出从军乐,风雨深宵一剑磨。

《少年军一》一卷,喋血生译,《浙江潮》附刊本。记一千八百六十四年美国南北战争,南部威尼亚兵学校生徒退校从军事。⁷⁾

少年军二

蜗髻愤气吞骄虏,不破重围誓不生。片纸邮书忽飞达,万人性命一身擎。

拔刀断指血淋漓,坐困睢阳厄数奇。读尽神州争战史,故应南八是男儿。

强将铁血励青年,祖国沉沦满目前。雪白头颅空老大,顺民降将一腥膻。

《少年军二》一卷,亦喋血生译,《浙江潮》附刊本。记一千八百四十八年伊大利抵抗奥国虎狼压制,不幸被围于克士阨,弹药罄矣,一十四龄勇少年为祖国出死力,作寄书邮以请援,伊大利兵卒获大胜焉⁸⁾。

专制虎

王僚尚饮专诸刃,嬴政犹惊博浪椎。孰谓中原

无暗杀，周秦早树党人碑。

民权欧美始萌芽，罗刹风潮十倍加。宪法未颁新政府，同胞志士已无家。

百折难回侠烈肠，誓倾血泪洗红妆。问谁制造虚无党，专制完全帝国皇。

《专制虎》一卷，喋血生译，《浙江潮》附刊本。记俄国大侦探米加野于圣彼得堡缉获虚无党爱圣夫人事。末云后数年乃有俄官人鬼事，则爱圣夫人流配西伯利亚，当在亚历山大第三时矣⁹⁾。

摄魂花

从古蛾眉是祸胎，竹林摧折有余哀。一瓿基督蔷薇露，断送巫云入梦来。

醉舞傲傲是邪非，波兰贵胃款朱扉。秋蝉待厌螳螂腹，岂料霜林伏杀机。

鬼魅无端幻化奇，元妻嫫母两传疑。莫斯科有留仙笔，应续聊斋志画皮。

旁行重译几聱牙，轶事疑文堪舛差。七字头衔应自诩，泰西说部校雠家。

《摄魂花》一卷，喋血生译，《浙江潮》附刊本。述俄国莫斯科步兵大佐伊科纳杜与其侄炮兵大尉勃兰芝傅同为人毒杀，后由老侦探米加野访得二人皆毕命于圣彼得堡妇人裘丽雅之手，所中者海姿濮儿之毒也。海姿濮儿，俗名基督蔷薇，其叶根含毒汁，初食之不觉，须食他物有油质者，毒始发云。

绣像小说所译者，名《俄国包探案》，以伊科纳杜为伊坤图，以勃兰芝傅为伯兰，以米加野为梅嘉谐，以裘丽雅为裘丽华，以海米濮儿为海留卜儿。译音小舛，叙述则无甚歧异，惟较《浙江潮》本稍曼衍耳。

《新小说》所译者，名《毒药案》，无歆羨斋主译述，所据似别一本。如以伊科纳杜为伊格拿辅，以勃兰芝傅为巴拉奴辅，以米加野为美卡威，以裘丽雅为焦利亚，以亚历山大德为亚历山大，以海姿濮儿为耶列波尔，译音颇有参差，叙事更多歧出。耶列波尔以基督蔷薇酸汁加药料制成，为焦利亚夫人所自造。又大侦探与亚历山大问答，又波兰伯爵伪银纸被窃后，竟以使用伪银纸捕得

亚历山大；又伯爵到焦利亚跳舞会，为特里辅所介绍，皆足补《浙江潮》本阙略，惟《摄魂花》与侦探同一画皮手段，则又为《新小说》本所未详也¹⁰⁾。

返魂香

小丑掷还金作赎，离奇电谕黑魔王。岂知咫尺深宫地，颠倒钧天梦一场。

玉食无端成祸水，蛰龙窟室认分明。尊严帝后如狮虎，不及巴黎一客卿。

《返魂香》一卷，喋血生译，《浙江潮》附刊本。记西班牙自罹拿破仑战祸，民凋财匮，生气奄如。至一千八百九十八年，美西战争之风云起，共和党无政府党之内讧，即踵布哇匪律宾之外患以起，加之董克仑派谋恢复正统，王位如暮燕。是时约芬十三世仅十二龄之稚子，太后玛利雅代摄庶政。稚子王以临幸阅兵，为庖人郭懋士所匿，大索不得。后由任满法公使密侦，得王于王宫地窟中。此书即公使所自述也。

《新小说》所译者名《窃皇案》，叙述大同小异，以郭懋士为戈灭，则译音之小舛耳¹¹⁾。

雌雄蜥

强将怨泪洗红妆，错过当年李十郎。誓向情场除薄幸，美人心事侠游肠。

爱林比翼忽分飞，万里风波款绮扉。一刹秋风捐故扇，温柔乡里伏危机。

黄笏天外雌雄蜥，情史新编色诫书。寂寞羊城游冶地，有人遥指旧时庐。

绿杨难作两家春，恨海无端起战尘。同命鸳鸯长已矣，可怜桃叶渡头人。

邃房秘密藏深阱，尚有雕梁一燕窥。三尺红罗销弱质，痴迷世界梦阑时。

《雌雄蜥》一卷，喋血生译，《浙江潮》附刊本。记法兰西名侦探律月氏缉获美利坚人梭齐，冒女为男，谋毙中国人松筠及其妻秦月怜事。梭齐原姓美丽，名舒敦，本民家子，嫁松筠三载，既归国，乃易男子装，托名游历来华，为并栖计。而松筠溺于爱姬秦月怜，美丽妒心难禁，乘间手

刃之，并及月怜。事发，美丽亦自缢¹²⁾。

通过徐兆玮的记述可知，喋血生翻译的以下三种小说在当时还有其他译本。这从某种程度说明，喋血生选择的小说作品在当时流传较广，并且受中国译者欢迎。

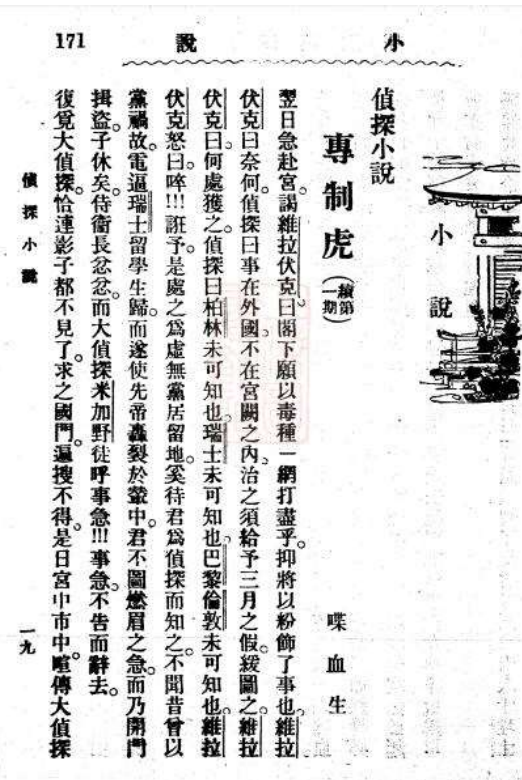
表2 喋血生译作的其他译本

喋血生译本	同一作品的其他译本
《专制虎》 载《浙江潮》 第一期、第三 期1903年2月 17日；4月17 日	冷血（陈景韩）译《绮罗纱夫人》 （见《 <small>偵探</small> 虚无党》，开明书店，1904 年）
《摄魂花》 载《浙江潮》 第三期， 1903年4月17 日	1.译者不明，《俄国包探案》（目录中 为“新译俄国包探案”）（见《绣像小 说》第21-22期，刊年未记） 2.无歆斋斋主译述《毒药案》（见 《新小说》第5号，光绪29年闰5.15 （1903.7.9））
《返魂香》 载《浙江潮》 第八期， 1903年10月 10日	法人某著，中国某译《窃皇案》（见 《新民丛报》第33、34期，光绪 29.5.14-5.29（1903.6.9-6.24））。后来 以《窃皇》为题，收录于新民丛报社 社员编辑《说部腋》（新小说社， 1905年），译者署“披发生”（罗 普）。

二、《浙江潮》上的喋血生译作及其日文底本

《浙江潮》月刊只存在了一年，就在这短短的一年中（具体说是从1903年2月17日到11月8日），喋血生一共发表了8篇作品（分11次刊载）。这些作品包括5部翻译小说，其中《少年军》系列连载三次，《专制虎》（写俄国虚无党事·笔者注）连载两次。另外还有3篇文章，亦是译作，分别是《维廉蒲斯夫妇合传》（维廉蒲斯夫妇当为William Booth and Catherine Booth，救世军创始人·笔者注）、《中国开放论（未完）》和《斯宾塞快乐派伦理学说（未完）》。这个数量是相当可观的，要知道同时期的鲁迅也才为《浙江潮》撰文5篇，分别是《斯巴达之魂》（第五期、

第九期）、《哀尘》（第五期）、《中国地质略论》（第八期）、《说钿》（第八期）、《地底旅行》（第十期）。可以说，喋血生是《浙江潮》不折不扣的主力作者、积极撰稿人。



■喋血生译《专制虎》

喋血生的作品，只有《消露》一篇署名为“喋血生译”，其他径署“喋血生”而无“译”字。但据笔者考察，喋血生在《浙江潮》上发表的作品全是译作，而且全译自日文。其翻译底本分别是：

由于三篇“军事小说”《少年军》从题目上看属于一个系列，因此容易让人误以为是从同一个底本连续翻译的¹³⁾。其实，《少年军（一）》底本为德富芦花译述「少年軍（南北戦争の花）」（近世歴史之片影）民友社、1893年7月）；《少年军（二）》底本为原抱一庵译「少年使者」（伊國十二健兒）内外出版協會、1902年5月）；《少年军（三）》底本为原抱一庵译『ABC組合』（内外出版協會、1902年2月）中的第1-3回¹⁴⁾。

“侦探小说”《专制虎》底本为德富芦花译「大

隠謀」(『探偵異聞』民友社、1900年11月)¹⁵⁾。

“小说”《摄魂花》底本为德富芦花译「毒菓」(『探偵異聞』民友社、1900年11月)¹⁶⁾。

“小说”《雌雄蜥》底本为德富芦花译「巢鴨奇談」(目录中为「巢鴨の奇談」)(『探偵異聞』民友社、1900年11月)¹⁷⁾。

“小说”《返魂香》底本为德富芦花译述「王の紛失」(『国民新聞』1898.4(后收入『外交奇譚』民友社、1898.10.13)¹⁸⁾。

“传记”《维廉蒲斯夫妇合传》底本为西川光次郎「救世軍の創設者ウキリヤム・ブース」(東京評論社編『人道之偉人』中庸堂、1901年5月)。

“论说”《中国开放论》底本为吉武源五郎译述「第二部支那之開放」(ポール・エス・ラインシュ著『世界政策』世界堂、1903年5月)中的「第一章 支那ノ社會及ヒ政治的特質」、第二章 外國民ガ支那ニ於テ獲タル利益ノ實質」。

“哲理”《斯宾塞快乐派伦理学说》根据ジョン・ワトソン著、綱島栄一郎補訳『快樂派倫理』(東京専門学校出版部、1901年10月)的「第九章 ハーバート・スペンサーの倫理説」(pp.167-184)译述。

依据喋血生与《浙江潮》的关系，可以推断出：此人精通日文，对文学创作尤其是翻译兴趣十足，而且能及时、便利地获取日本新出版的图书报刊，留日学生的可能性比较大。另外，在翻译《中国开放论》时，喋血生在文中提到“余观列国岁计表、余读列国商业发达史”，可见他对经济问题亦十分关注。

三、喋血生是陈景韩的笔名吗？

喋血生到底是谁？目前，学术界有争论。有些论著径直将其认作陈景韩（1878-1965，清末小说翻译家），但没有证据，也没有论证¹⁹⁾。有些论著认为喋血生不是陈景韩。比如，樽本照雄教授曾以译本郁马的笔名在「『綺羅紗夫人』の原作」(『清末小説から』第118号、2015年7月)

一文中提出两人可能是不同的人，因为虽然喋血生译《专制虎》与陈景韩译《绮罗纱夫人》出自同一底本，但是人物名字的译法不同。

笔者对此也进行了初步的梳理。如上文所说，刊于《浙江潮》第七期的喋血生译作《少年军(二)》，后又重刊于《月月小说》第九期。《少年军》重刊时，正文页署名“社员”（目录页署“社员旧著”·笔者注），这意味着“喋血生”是《月月小说》社成员。这是目前唯一能找到的确切资料。但《月月小说》社员有许多人，包括吴趸人、周桂笙、陈景韩、包天笑等。哪一位才是真正的喋血生呢？笔者觉得，陈景韩可能性较大。

第一，《少年军(二)》重刊时，正值陈景韩加入《月月小说》时期。据李志梅《报人作家陈景韩及其小说研究》云，“光绪三十三年四月，《月月小说》在第八期出版后突然中断……五个月月后，由沈济宣等筹资，许伏民任总编辑，《月月小说》才重新出版。但此时，撰稿人有一些调整，除吴趸人、周桂笙继续撰译外，陈景韩和包天笑作为头号招牌被聘进《月月小说》”²⁰⁾。这表明陈景韩具有了署名《月月小说》“社员”的权利。而且从第十期开始，陈景韩作品即开始登陆《月月小说》。

第二，喋血生与陈景韩的翻译偏好相近。首先，喋血生译《专制虎》与冷血（陈景韩）译《绮罗纱夫人》底本相同。其次，《少年军(三)》译自雨果《悲惨世界》，这与陈景韩的翻译经历比较一致。他翻译的《游皮》(《侦探谈一》上海：时中书局，1903)是雨果《随见录》的节译；《英文之_一逸犯》(《时报》1907.8.16-9.4)是雨果《悲惨世界》的节译；《英文之_一逸犯》(《小说时报》第4期，1910)和《卖解女儿》(《小说时报》第9期，1911)是《巴黎圣母院》的节译。此外，陈景韩喜爱转译原抱一庵的译作。比如，《食人会》(《新新小说》第1号)、《圣人钦盗贼欤》(《新新小说》第1.2.3号)、《巴黎之秘密》(《新新小说》第2.3.4.5.8.9号)、《白格》(目录为“白格氏”，见《俄文之_一虚无党》开明书店，1904)都是以原抱一庵的译文为底本的。而喋血生译

国家社科基金重大项目“近代以来中日文学关系研究与文献整理(1870-2000)”(17ZDA277)的阶段性成果。(作者单位:同济大学外国语学院,上海行政学院校刊编辑部)

【注】

- 1) 《萃新报发刊词》,《萃新报》第1期,光绪甲辰五月十四日。
- 2) 王绿萍:《四川报刊五十年集成1897-1949》,四川大学出版社,2011年,第71页。
- 3) 方汉奇:《中国新闻事业编年史》(上),福建人民出版社,2000年,第859-860页。
- 4) 松岑《论写情小说于新社会之关系》,《新小说》第2卷第5期,1905年。
- 5) 陶曾佑:《中国文学之概观》,《著作林》第13期,1906-1908年。
- 6) 徐兆玮:《徐兆玮日记》(1),黄山书社,2013年,468-478页。
- 7) 徐兆玮:《读译本小说诗》//《徐兆玮杂著七种》,凤凰出版社,2014年,第421页。
- 8) 同上,第421-422页。
- 9) 同上,第428页。
- 10) 同上,第429页。
- 11) 同上,第429-430页。
- 12) 同上,430-431页。
- 13) 梁艳:《日本翻译家原抱一庵在中国》,《日本文学研究:东京·上海·广州:漂泊的身体与文本》,青岛出版社,2016年,第285页。
- 14) 《少年军》(一)(三)的底本为渡边浩司所考证(见樽本照雄编《清末民初小说目录第11版》,清末小说研究会,2019年,第4157页)。梁艳在《日本翻译家原抱一庵在中国》(见脚注13,第285页)一文中考证了《少年军》(二)的底本,对《少年军》(三)的底本也有论及。
- 15) 此为渡边浩司考证,见樽本照雄编《清末民初小说目录第11版》,第6484页。
- 16) 此为渡边浩司考证,见樽本照雄编《清末民初小说目录第11版》,第4179页。
- 17) 此为笔者考证。本文中如无特殊说明,底本均为笔者考证,下同。
- 18) 此底本参见樽本照雄编《清末民初小说目录第11版》,第1122页。
- 19) 李艳丽在《论林译〈不如归〉与外交侦探小说在晚清的接受》(《福建工程学院学报》2012年第5期)、《晚清日语小说译介研究(1898-1911)》(上海社会科学院出版社,2014年,第34页)中说:“《浙江潮》1-3期上登载了署名‘喋血生’翻译的《专制党》,此处的‘喋血生’已知是陈景韩”,不过并没有给出“喋血生”就是陈景韩的证据。
- 20) 李志梅:《报人作家陈景韩及其小说研究》,华东师范大学博士学位论文,2005年,第81-82页。

清末小説から

野間信幸氏より資料をいただきました。感謝。

魏惟儀『婦去来』

台湾・大地出版社1987.4/1987.5再版

父親的故事
父親的手稿
我的父親——魏易

張治『蝸耕集』

杭州・浙江大学出版社2012.5 六合叢書

林訳小説中の兩部児童故事集
最早“転販”西方中古文学的林訳小説
《紅星佚史》与《金梭神女再生録》

『上海魯迅研究:魯迅与翻訳』総第82輯

2019.6

重温魯迅的“直訳”説 ……顧 音海
魯迅早期科学類翻訳探究 ……楽 融

魏 名婁○陸鏡若と日本の演劇人たち 金沢大学

『社会環境研究』第10号 2005.3

陳 建華○林紓与現代“小説”觀念的形成 『帝制
末与世紀末——中国文学文化考論』上海世紀

- 出版股份公司、上海教育出版社2006.12
- 李麗○『生成と接受：中国児童文学翻訳研究(1898-1949)』武漢・湖北長江出版集團、湖北人民出版社2010.6
- 曲振明○『旧書刊擲珍』上海世紀出版股份有限公司遠東出版社2014.7
- 梁艷○翻訳家原抱一庵在中国 李征、譚晶華、魏大海主編『日本文学研究：東京・上海・広州——漂泊の身体と文本(日本文学研究会広州年会論文集)』青島出版社2016.8
- 狄霞晨○【書評】“林紓冤案”の背後…… ウェブサイト『文匯読書週報』2019.1.14
- 【書評】冤！魯迅和胡適の矛盾為何瞄准林紓？ ウェブサイト『文匯読書週報』2019.1.14
- 喻血輪著○『喻血輪集』上下 眉睫編校 武漢・華中師範大学出版社2018.6 荆楚文庫
- 眉睫○(『喻血輪集』上下)前言 喻血輪著 眉睫編校 武漢・華中師範大学出版社2018.6 荆楚文庫
- 鄒波○東アジアにおける『ドラ・ソーン』の翻訳と翻案——小説の翻訳を中心に 香港日本語教育研究会『日本学刊』第21号 2018.8
- 羅紫鵬○『《申報》《新申報》小説家述考(1907-1919)』北京・中国社会科学出版社2018.12
- 陳建華○『紫羅蘭的魅影；周瘦鵑与上海文学文化,1911-1949』上海世紀出版集團、上海文藝出版社2019.1
- 王純菲、周徳波等著○『西学東漸与文学变革』北京・社会科学文献出版社・經濟与管理分社 2019.4 漢語言文学中国特色研究叢書
- 李妮娜○『比較文学視野下近代中日文学研究』北京・新華出版社2019.4
- 関詩珮○『晚清中国小説観念訳転——翻訳語「小説」の生成及実践』香港・商務印書館(香港)有限公司2019.5
- 魏艷○『福爾摩斯来中国：偵探小説財中国的跨文化傳播』北京大学出版社2019.6
- 吳翔宇、徐健豪著○『中国児童文学編年史(1908-1949)』南京大学出版社2019.6
- 張菊玲、李紅雨編○『清末民初旗人京話小説集萃』全3冊 北京・作家出版社有限公司2019.7
- 郭丹、朱曉慧主編○『林紓研究論集』台湾・崧燁文化事業有限公司2019.7(注：北京・九州出版社2018.6と同一書名同一内容)
- 梁冬麗○近代嶺南報人小説家王斧考述 『明清小説研究』2019年第3期(総第133期) 2019.7.15
- 付建舟○『商務印書館《説部叢書》叙録』北京・中国社会科学出版社2019.8
- 樽本照雄○(『商務印書館《説部叢書》叙録』)序 付建舟『商務印書館《説部叢書》叙録』北京・中国社会科学出版社2019.8
- 張蕾○《花月痕》之“痕”——兼論中国現代小説抒情伝統 『中国現代文学研究叢刊』2019年第8期(総第241期) 2019.8.15
- 鄭珊瑚○【書評】文化史的觀照与文学研究の另一學術進路——陳平原《左图右史与西学東漸——晚清画報研究》 『中国現代文学研究叢刊』2019年第8期(総第241期) 2019.8.15
- 王海瑛○清末民初翻譯話劇略考(1907-1917) 『新文学史料』2019年第3期(総第164期) 2019.8.22
- 劉曉寧、程国賦○新發現的近代嶺南報刊小説史料 『明清小説研究』2019年第4期(総第134期) 2019.10.15

★

『清末小説から』第137号 予告

2020.4.1

- いくたびかの阿英目録27 ……………樽本照雄
- 劉家公認の贋作『老残遊記』 ……………神田一三
- 包天笑「空中戦争未来記」など(下) ……荒井由美
- 付建舟『商務印書館《説部叢書》叙録』について ……………樽本照雄

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>